

私たちの郷土 守口の歴史

# 東海道五十七次 守口宿



東海道五十七次 守口宿 文祿堤 本町橋

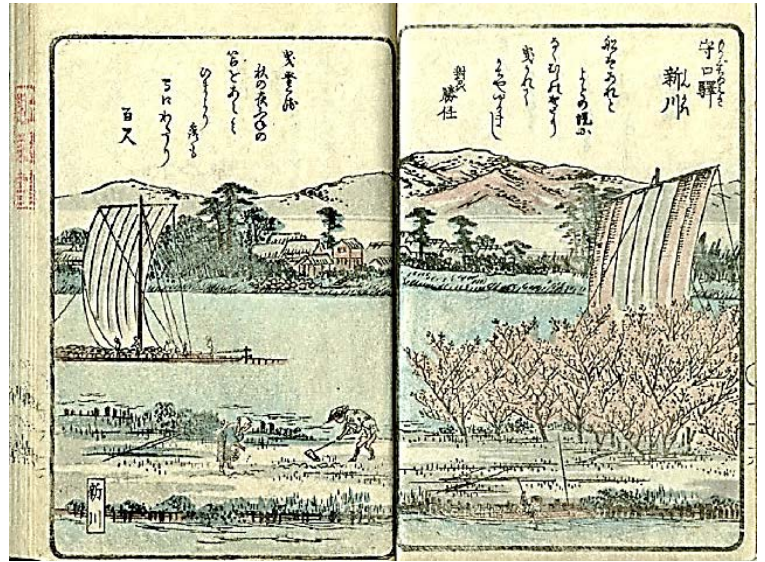
守口市名誉市民 南画家 直原玉青画伯 作

令和7年12月

編集 岸田 護

(郷土史研究家・守口門真歴史街道推進協議会顧問)

推薦：守口門真歴史街道推進協議会



淀川両岸一覽上船之卷 / 暁晴翁 著、松川半山 画  
(出典：大阪市立図書館)

## 守口驛 新川

船はあれど  
よどの堤に  
なくむしの声に  
曳(ひ)かれて  
かちやゆかまし  
対州  
勝任

曳き登る  
秋の夜ぶねの  
苦(とまり)をあらみ  
ひまより  
露も  
守口わたり  
百尺

この絵は、新川を右岸側から曳(ひ)き上げている三十石船からの景色とされています。淀川右岸沿いから見た対岸の左岸、守口あたりの風景を描いています。この川筋には猿島とよばれる中洲があり、中洲で畑作業をする2人の農夫の姿が描かれています。長だいこんは中洲の砂地で育てるのが適しています。このあたりで宮前大根を作っていたのでしょう。絵の左下には「新川」の文字があります。

### ■猿島

土居・守口の間、前にある島をいふ。土人(=地元の人々)、中の島といふ。

### ■守口驛

土居村の上にあります。これより岸をはなれ内に入る。

浪華(なにわ・ろうか)より京師(けいし)に上る陸路の官道第一の駅なり。

高麗橋(こうらいばし)より此の地に至る行程二里。歴(へ)るところ、片町、野田町、野江、内代、関目、森小路、今市、土居等なり。

是を本街道あるいは東街道(=東海道)といふ。

さるほどに、伝舎(はたごや)軒をならべ、飯盛(めしもり)の女昼の支度をすすめ、夜の泊(とまり)を引く。問屋場(といやば)に人馬の掛引しげく、馬夫(まご)・雲助の(くもすけ)声高(こわだか)に罵(ののし)るなど、駅路(うまやじ)の風(ならひ)にして、ひとへに地方(ところ)繁昌(はんじょう)といふべし。

さてまた長菜蕒(だいこん)の糟漬(かすづけ)は当所の名物にして、世に守口醃(づけ)と号す。

風味殊更(ふうみことさら)に美なり。因(ちなみ)みに云う、この長菜蕒(ながだいこん)は生なる時は宮前菜蕒(みやまえだいこん)と号し、往昔(いにしへ)は摂州天満天神(せつしゅうてんまてんじん)の宮前(みやまえ)いまだ田圃(でんぼ)なりし時、作出せしを以(もつ)て宮前の号あり。

然(しか)るに浪花繁榮(ろうかはんえい)に随(したが)ひ、漸(しだい)に土地ひらけて、今は宮前はいふも更なり、宮後(みやうしろ)も数十町人家(すうじゅっちょうじんか)となり、此の大根も当時は長柄(ながら)の辺にて作るよし。然(しか)れども尚旧名を用ひて宮前菜蕒と称す。尔有(さる)を此(この)守口に求めて糟蔵(かすづけ)にし、守口漬けといふ。

### ■南十番

守口の上にあります。陸路の街道は当村の傍を往来す。当村は川岸より内にあります。(本文より抜粋)



お江戸日本橋

守口宿について

『淀川兩岸一覽』守口駅

文祿堤と豊臣秀吉

東海道と守口宿

東海道の発達 人馬の制

東海道の里程表

東海道 57 次 守口宿

守口宿の起こり

守口宿 守口の形態

守口宿の状況

守口宿内の様子

下の見付 馬車駅跡

船頭ヶ浜 本町2丁目付近 8・9

来迎坂となら、のざきへの道標 10

五ヶ荘用水路跡

川東提灯屋さん 11

高札場付近 12

大塩平八郎と門真・守口地方 13

白井家 14

問屋場について 問屋場の仕事 15

守口宿と問屋場

助郷の起こり 本陣 16

難宗寺 17

東西本願寺の分立 18

明治天皇行幸 19

問屋役人吉田邸 20

東海道は お江戸日本橋を起点として京都三条大橋が終点でした。その間に品川を第一宿駅として、大津宿駅は第五十三番目の宿場でした。すなわち東海道には五十三の宿場がありました。

後に、大名行列の京都通行が禁止され、道中奉行の公式の取り扱いでは、東海道は、大津宿から逢坂山を越え「追分」を左折して伏見、淀、枚方、守口宿に至る五十七次となりました。

また、「お江戸日本橋七つ立ち…」とありますが、現在の午前4時で、いわゆる早立ちです。



橋も渡 船もない川

東海道は江戸から、酒匂川、奥津川、阿部川、大井川の四つの川には、橋を架けることを禁止しました。それは、江戸の幕府を守るための軍事的な役割があったからです。

旅人は、蓮台か肩車などによることを強制されました。川越と川会所などが置かれていました。



船での渡し

浜名湖は、地震で海とつながり、「今切れの渡し」ができ、海上を約1里(約3.9km)を船で渡すことになり新居の関所の所に船会所をつくり、新居宿と舞坂宿間を船で渡りました。

しかし、女性は「今切れ」という言葉を嫌って、陸路の本坂道(姫街道)を見付宿から御油宿まで歩きました。

また、宮宿と桑名宿の間に、「七里の渡し」があり、約27kmを4時間もかかるので、女性たちは、船の渡しの少ない佐屋路を利用しました。



松並木

街道筋には、松・杉・かし・桧などを植え並木道がつけられました。

これは旅人を風雨や日ざしなどから守るためです。

石橋家 大和屋(朝陽堂)宿雁

盛泉寺	21
瓶橋跡 青木家	22
一里塚	23
光明寺 八雲神社・正迎寺	24
佐太地域	25
佐太の間宿	26
菅原道真と佐太天満宮	27
来迎寺	28
菅相寺 佐太神社と永井家	29
守口夢ごよみ	30
旧守口町の明治18年の古地図	31
東海道 57 次守口宿内図	

資料集

本陣と脇本陣

本陣も脇本陣も玄関、門書院が許されました。

本陣は、大名や天皇の勅使や公家、幕府の役人などが宿泊しました。一般の人は利用できません。

脇本陣は、本陣が使用されているときに予備として利用でき、普段は、一般の旅籠として営業していました。

守口宿には本陣が1軒。脇本陣はありませんでした。



関所

街道筋には、いくつもの関所がありました。特に「箱根の関所」と「新居の関所」は厳しく、そのなかでも、「入り鉄砲に出女」、入り鉄砲は、江戸に武器が入らないように。

出女は大名の妻子は江戸に人質とされていたので、逃げ出さないように目を光らせていました。



さんきんこうたい  
参勤交代

大名は妻子を江戸に置き、1年おきに江戸と領地の間を行き来した。このときの従者・武器の数は、石高により定められていて、経費のかかるものであり、大名の負担は大きかった。



大阪江戸間の所要時間

大	新幹線		3 時間	江
大	バス		8 時間	江
大	馬		14 日～15 日	江
大	籠		14 日～15 日 徒歩とあまり変わらない	江
阪	飛脚		(公用文書) 36 時間～37 時間(二人で) (普通飛脚) 48 時間(4 日間) (三度飛脚 2・12・22 日) 6～9 日間	戸
阪	徒歩		14 日～15 日(1 日 10 里～40km あるく)	戸



制作/一般社団法人 守口文庫

## 【文禄堤と豊臣秀吉】

豊臣秀吉は、天正17年(1594)1月より、茶々の産所として、淀の納所に淀城(現妙教寺)を大工事の末、3月には主な建物を完成しました。そこに茶々を入城させ淀殿と呼びました。同年5月27日鶴松を産みました。しかし、天正19年には鶴松は3歳で亡くなりました。※茶々がなくなってから淀君と呼ばれた。

伏見に文禄元年(1592)にすでに城を建てかけていました。ところがもう子どもはあきらめていましたが、茶々に文禄2年(1593)8月3日に「拾」(のちの秀頼)が生まれ、今度は秀頼のために伏見城の建設を急ぎました。淀殿の産所となっていた納所の城はいらなくなり、矢倉なども伏見城に移しつづけてしまいました。

そして、伏見と大坂を結ぶ道路が必要となり文禄3年(1594)に毛利三家(毛利輝元、小早川隆景、吉川廣家)と淀屋に命じて、淀川兩岸に堤防を造らせ、慶長元年に完成しました。

それで文禄堤とか慶長堤と呼ばれ、伏見と納所あたりまでは、「太閤堤」とも呼ばれています。※守口には文禄堤として700m程現存しています。



文禄堤と現在の淀川堤防

### 文禄堤の役割は

一、伏見と大坂を結ぶ最短距離の道で、15.281間(約27,8km)。

それまでは、淀川を利用するか、伏見から八幡まで舟で、そのあと東高野街道から奈良街道や古堤街道を通り大坂へ入っていました。

一、淀川からの洪水を防ぐため、文禄堤は淀川の兩岸につくられました。

一、軍事用の道路でもありました。

敵の侵入を防ぐために堤防を切り、大坂を湖のように考えました。

この堤防は大工事で、昼夜にわたり行われ、付近から多くの石が集められ、墓石まで使ったと言われています。

地元の守口や門真の人は大変な労働を虐げられたと思います。



八島交差点付近の竜田通り(坂の上は本町筋)  
『グラフ守口37号』

## 東海道と守口宿

### 【東海道の発達】

徳川家康は、慶長 5 年(1600)、関ヶ原の戦いで勝利し、翌年から道路に力をいれ、特に江戸と京都を結ぶ「東海道」が最も重要な道路として、慶長 6 年の正月に各宿ごとに伝馬 36 疋を義務づけました。

この馬を使えるのは、徳川家康によって「伝馬朱印」が発行され、それを宿で見せれば、馬は無料で使うことができました。

慶長 7 年 6 月には、江戸町年寄の奈良屋市右衛門と樽屋三郎の名前で各宿間の駄賃が決められ、これが後に、御定賃銭や無賃または、公定賃銭などのもとになりました。

慶長9年には「日本橋」が、陸路北への中山道・日光街道・奥州街道、西への甲州街道、南への東海道の起点と定められました。

また、東海道は静岡県の浜名湖の今切れ渡しを避けるために

静岡県の見付宿から愛知県の御油宿迄の本坂道(姫街道)や宮宿と桑名宿の間に大きな川(七里の渡し)を避けるために佐屋路の脇街道(枝道)もありました。

東海道も、豊臣氏がほろぶと、大坂に大坂城代をおき、西国の支配のために、伏見、淀、枚方、守口の各宿から大坂まで延長されました。

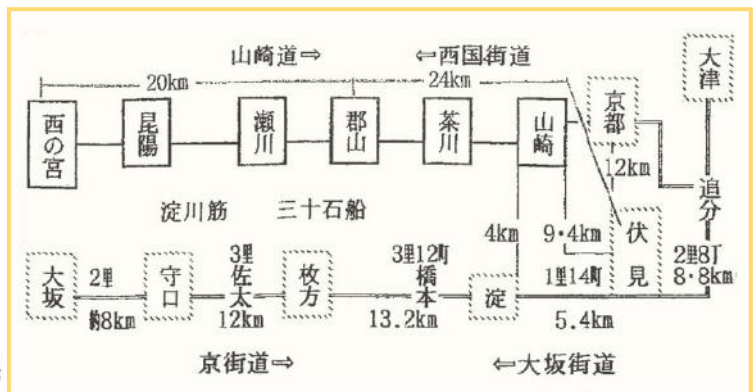
伏見から大坂までを京街道とか大坂街道とよばれていました。

### 人馬の制

三代将軍家光が寛永 12 年(1635)に武家諸法度を出し、その一つに参勤交代の決まりができ、毎年 200 余りの大名たちが、自分の領国から江戸の間を行き来するようになると、街道を多くの人たちが通行することになり、東海道は各宿場に人夫百人、馬百疋を常備させることが決められました。

中山道(正徳 6 年仙⇒山と書く)人夫 50 人、馬 50 疋。

日光道中・奥州道中・甲州道中や例弊使・御成・佐屋の各街道は、人夫 25 人。馬 25 疋を常備する決まりがありました。※守口宿は人足宿で馬はいません。また東海道の宿場で最後に設置されたのは、寛永元年(1624)の「庄野宿」です。



京街道(大坂街道)の宿駅間の里程図



【京街道が東海道に】

元和元年(1615)に、大坂夏の陣で豊臣氏が滅ぶと、大坂城を基盤に西国を支配するために、東海道を大坂まで延長されました。守口宿や枚方宿は元和2年頃に設置されたと考えられています。

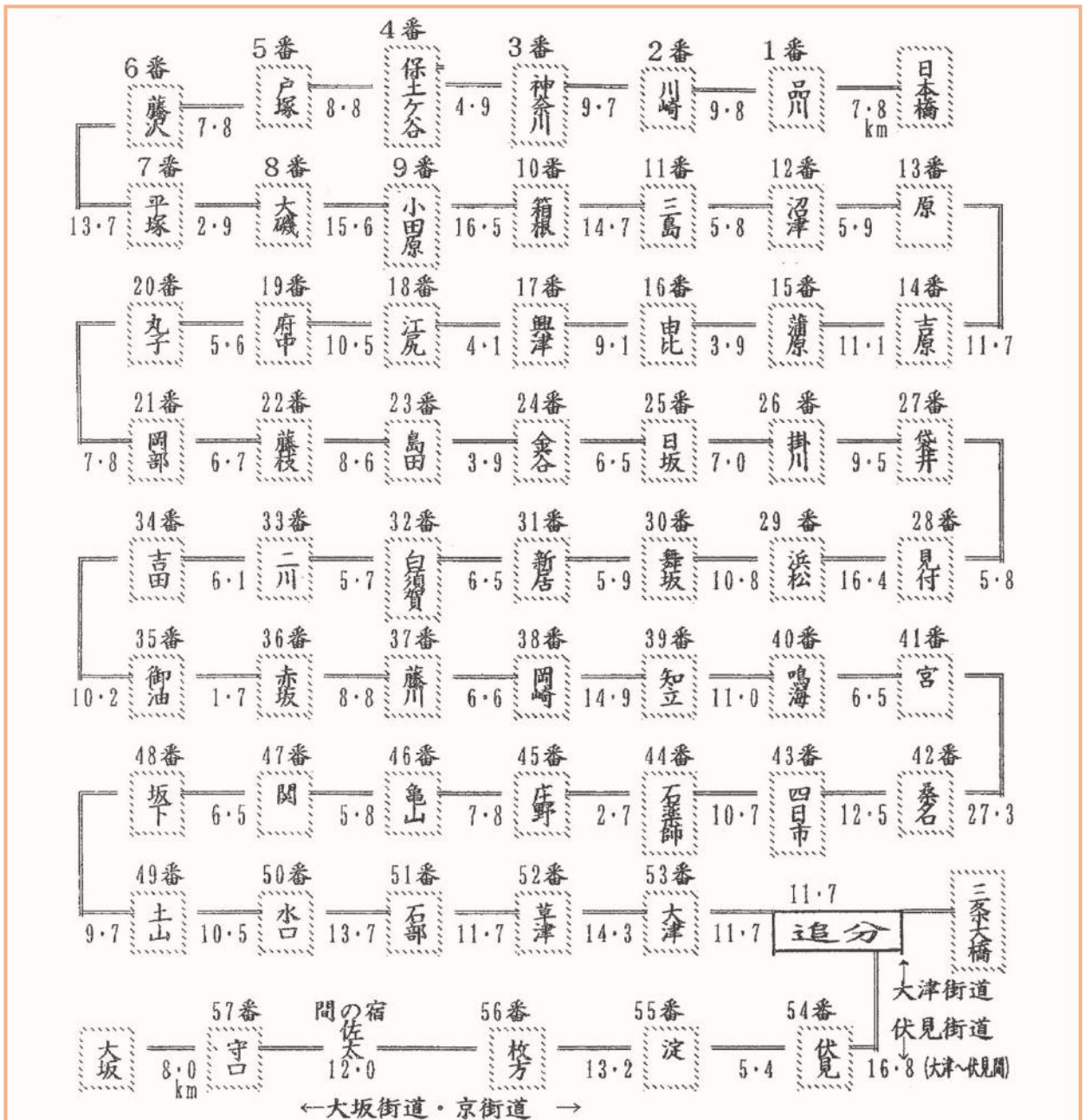
それによって。

○東海道は、江戸日本橋から大坂京橋。後に高麗橋まで延びました。

○東海道57次は、1番目の宿駅は品川宿で、57番目の宿駅は守口宿です。

東海道53次は、江戸日本橋～京都三条大橋 約126里(約492,1km)

東海道57次は、江戸日本橋～大坂京橋 約140里(約547,5km)



江戸京都間の距離は資料により、多少違います。東海道は、何の障害もなければ、一人前の男であれば、1日10里(約40km)は歩きます。江戸京都間は(約492～496km)であるので、13日くらいで歩きます。女連れでも1日平均6里(23,6km)から8里(32km)は歩きました。江戸大坂間は、江戸京都間に1日プラスです。

## 東海道 57 次 守口宿

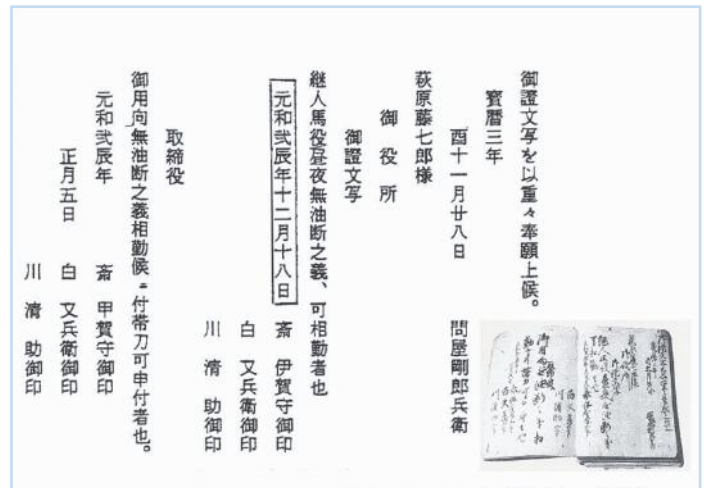
### 【守口宿の起こり】

守口は、江戸の昔より、「東海道 57 次の宿場」として栄えてきました。宿駅は江戸を中心に各地方と結ぶ道をつくりました。

<sup>げんな</sup>元和元年(1615)に、豊臣氏がほろぶと、上方や西国を支配するために、大坂に拠点を置きました。そのため東海道も大坂まで延長しました。

「守口は東海道の57番目の宿場」

となりました。成立の時期については、<sup>めいかく</sup>明確ではありませんが、右の資料の守口宿場関係の書には、<sup>げんな</sup>元和2年(1616)12月18日とあり、このころに東海道57番目の宿場になったとおもわれます。



守口宿の成立期は明確ではありませんが、守口宿が初めて出てくるこの資料の『御証文』の□□に元和2年12月18日とあり、このころに東海道の宿場となったと思われます。

『民間省要』に「道中は諸所に至るといえど、まず東海道 56 次を第

1とす」とあり、また『五駅便覧』には、「江戸より大坂まで、馬継五十六宿、外人足一ヶ宿道方合百三十七里四町一間、船共。」この外人足一ヶ宿とは守口宿のことです。

「江戸より京都迄、馬継五十三ヶ宿、道方合百二十六里六町一間」とあります。このように東海道については、江戸～大坂と江戸～京都間の2コースの距離が示してあります。

守口宿は、江戸からみて、東海道の最終の宿で「<sup>とま</sup>留り宿」などと呼ばれ、大坂からみれば、はじめの宿「<sup>つけだ</sup>附出し」・「初めの口」の宿と呼ばれていました。東海道を、kmで表すと、江戸・京都間が約 500km で、当時の人たちは、一人前の男なら 1 日 40km(10 里)で、休憩を入れても 1 里(4km)を 1 時間で歩き、一人前の男なら 13 日間位で歩きました。大坂までは、あと 1 日プラスすればいいわけです。

## 【守口宿】

一般的に宿場は、いくつかの村や町によって成り立っています。

隣の枚方宿は、岡新町村・岡村・三<sup>み</sup>矢<sup>や</sup>村・泥<sup>ぬ</sup>町<sup>ちやう</sup>村の四ヶ所からなっています。守口宿は守口町だけで成り立っていました。町や村は行政上では、それぞれの領主の支配をうけますが、道中奉行管轄<sup>かんかつ しゆく</sup>の宿では、宿に関する事は道中奉行の支配<sup>かんかつがい</sup>をうけました。道中奉行の管轄外<sup>どうちゆうぶぎやうかんかつか</sup>の宿では、宿のことも、その領主の支配をうけました。そこで道中奉行管轄下の宿、すなわち五街道の宿の宿民は二重の支配をうけていました。

守口宿は、『東海道宿村大概帳』によると、明和5年(1768)守口町明細帳<sup>めいさいちやう</sup>では、当宿管轄<sup>おうかん</sup>の往還(街道)は、南十番村より森小路境まで。

道幅二間～二間半(約 3,6m ～ 4,5m)。

うち文禄堤上 391 間(約 720m)。

宿内街道の長さは、21 町 31 間(約 2.3km)。

宿内町並み南北 11 町 51 間(約 1.3km)。

町並みの幅約 1 町(109m)

宿<sup>しゆくぼうし</sup>勝示は南十番村境に 1 ヶ所

土居村境に 1 ヶ所

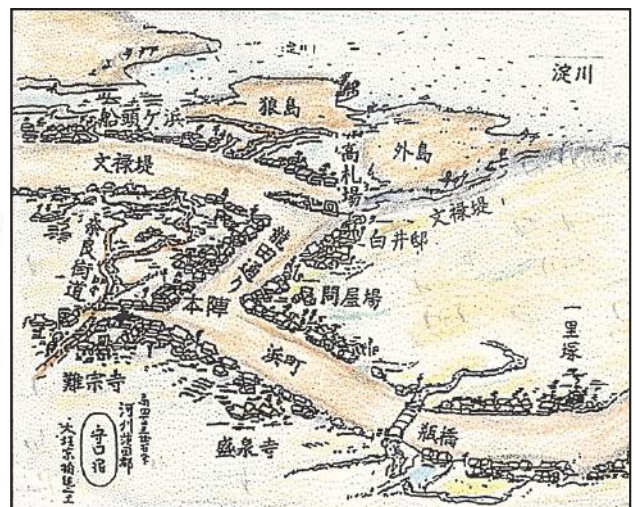


天保 13年(1842)宿高井家数人別帳

## 【守口宿の形態】

守口宿は、宿場の安全を考え枝郷という、裏町や横町はできるだけ少なくし、字来迎町<sup>あざらいごうちやう</sup>の所と旧奈良街道に伸びている下の所と。淀川筋の船頭ヶ浜に3～4軒あったくらいです。街道筋の両側に、間口6間を、基準とした家が立ち並んでいました。

その後ろ側には同じ幅の畑がありました。また、町の周囲には用水路があり、<sup>かんごうしゆうらく</sup>「環濠集落」をなしていました。



文化年間(1801～1817)の守口縮図:国立博物館  
わかりやすくするために地名を入れ、着色しました。

## 【守口宿の状況】

守口宿は、守口町だけで成り立っている宿であるので、馬継・馬役はなく人足(歩行役)のみであり、交通量も少なく、負担の割合が軽かったのです。このような歩行役の町は比較的通行者が少なく無役町とか脇町(わきまち)といって地子免許(年貢)の免除をしてもらえなかったもので、「御年貢町」とよばれました。しかし、守口宿も本陣(ほんじん)や問屋場(問屋場の公用を行う事務所)などの公的施設を設け、人足も100人常備していたので、宿民の負担を軽くするために、元禄元年(1688)になって、地子免許(年貢)5,000坪や問屋給米、御継飛脚給米などが毎年免除されました。

延宝年間(1673~80)の終わりのころの「守口町」の推測される記録では

惣家数	179軒	守口宿には、旅籠(旅館)や木賃宿など27~8軒ありました。旅籠は、夕食と朝食の2食つきで、木賃宿は、米などを持参し、薪(まき)代を払って自炊できる宿。	人足負担者は78戸
破損家	25軒		
無恙家	75軒		
(変わらない)			
無役	76軒		



問屋場の風景  
(直原玉青画伯作)

元禄2年(1689)には77軒に減り、享保10年(1725)には76戸で、以後は、人足役株が76株と固定しました。宿・助郷は毎日、半々ずつ勤めあっていました。これ以来は宿方で毎日100人が勤めて、その他に人足が入用のときは、助郷より勤めるようにいわれました。

東海道『京街道四宿』間の御定駄賃・人足賃銭

『宿駅』児玉幸多著参考

『京街道四宿』宿間までの駄賃・人足賃銭(文)	大坂~守口 2里	守口~枚方 3里	大坂~枚方 5里	枚方~淀 3里	淀~伏見 1里14丁	伏見~大津 4里8丁
正徳元年(1711) 乗掛荷物人足	—	—	263文	151文	53文	179文
天保15年			341文	202文	72文	265文
正徳元年 軽尻馬1疋	—	—	165文	95文	35文	113文
天保15年			225文	132文	47文	168文
正徳元年 人足1人	44文	68文	125文	73文	26文	84文
天保15年	59文	108文	天保14年 167文	103文	35文	弘化元年 130文

正徳元年(1711)。米1石は銀58匁(1匁は銭165文)・・・米価は大きく変動します。

天保14年(1843)。米1石は銀81匁…(天保15年=弘化元年)

【守口宿内の様子】

【下の見付】



大坂から江戸へ上るとき、木戸があり、その脇に番所がありました。木戸は夜は閉められていました。



【馬車駅跡】

明治43年(1980)まで、大坂の東野田や枚方へ馬車が通っていた駅跡です。



宿場のなかにこのような茶店がありました。

【柿右衛門】

(料亭)

守居橋は、守口から土居に通じる橋であるところから、守口の守と土居の居の二字をとり守居橋と名付けました。



守居橋



本町橋

守居橋同様新しい淀川の堤防ができて文禄堤を本町のところを切り開きできた本町橋です。



ほんもんぶつりゅうしゅうかくりんざんぎてんじ

【本門仏立宗鶴林山義天寺(日蓮宗)】

につせんしようにん

京  
街  
道

仏立宗の開祖、日扇上人が明治23年(1890)7月17日大坂へ下る途中体を悪くして堤防上の茶店丁子屋(森田伊六の新座敷)で休息され、ここで息を引き取りました。後に、日聞上人がこの茶店を買い取り、この地に明治29年、七回忌に講の信者の人々と共に法要を営み「御遷化地道場」を建てたのが義天寺の始まりです。

後に、寺号を鶴林山義天寺となり何度か改修工事が行われましたが「義天閣」はそのまま保存されています。当寺には「南無妙法蓮華経」のお題目の石碑がありますが、これは大坂の野江の刑場にあったものをここに移されたものです。



野江の刑場から移されたお題目石

【旅籠茶屋丁子屋】宿雁(らくがん)などを売る茶店。

しゆくがん



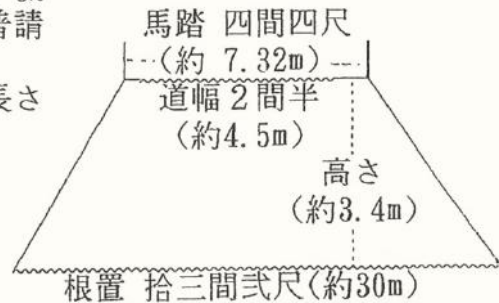
明治20年初期の守口のジオラマ(義天寺所有)

【文禄堤断面図】

ほんていぼうよどがわおんこくやくふ しん  
本堤防淀川御国役普請

淀川表御国役堤防長さ  
六百八拾七間

高さ 常水面より  
壹丈貳尺



守口や門真地方は、文禄堤や環濠集落の堤防などいろいろありますが、堤防の根置・幅・高さなどがきめられていました。

守口宿や枚方宿などの京街道は、淀川を三十石船で旅人が上下し、また、淀川の向側には、西国街道があり、旅人の通行が少なく、これらの宿場は潤いが少なく、片宿と呼ばれていました。



三十石船：全長約17疋、幅約2.5疋、定員28人~30人、船頭4人

本町橋



文禄堤の断面が見える所



十三夜坂



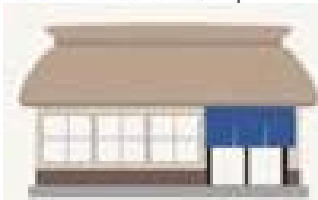
本町二丁目(堤町)京街道



この辺りより、古い「厨子=つし二階」建てで、「虫籠窓」と格子戸のある建物が建ち並んでいます。

【大西家跡】

昔は、薬屋さんでした。



【船頭ヶ浜】少し突き出た所

船頭ヶ浜は守口の船の発着場で、船頭たちの家四軒ほどありました。

周辺の人たちも、村中の水路や大八車でここに年貢米を運び、二条城や難波御蔵に、その他の荷物なども諸国に積み出していました。

守口や毛馬<sup>けま</sup>あたりでは、江戸の末期頃には数隻の「くらわんか舟<sup>すうせき</sup>」を出していました。



市立枚方宿鍵屋資料館

【別館中華料理 追立<sup>おいたて</sup>】

追立は現在移転し、紅茶のお店「文禄堤薩摩英国館」が営業しています。

江戸時代に使われた井戸が残っています。



【郷蔵跡<sup>ごうぐら</sup>】

郷蔵は江戸時代、年貢米を領主に運送するまで、保存しておく蔵。蔵は年貢米三升三合が免除されていました。

※蔵屋敷は20数年ほど前まで残っていました。



街村(街道に沿って民家が立ち並んで発生した細長い集落)で宿場の形態を残す本町筋『グラフ守口40号』

【西田屋】  
(あかねや)

茜屋

茜屋は呉服店を営んでおられました。現存する最も古い守口宿の建物とされていましたが、現在は新しく建て替えられています。



厨子・つし二階とは低い二階の建物で武士などが、刀を振り回さないようにとか言われています。商家などは、屋根裏や天井裏といって倉庫がわりの物置にした。

(卯建)



【徳永家】  
守口漬けの生産と販売をされていました。右(写真)の徳永家の本家です。

みよし写真館



虫籠窓は外から見て虫籠に似ているところからこのように呼ばれています。たて格子の窓に、漆喰で漆籠(ぬりごめ)たものです。火災や泥棒などの防犯のためでもあります。



【みよし写真館】本二階建て

本町二丁目

街道には、古い二階の低い「厨子二階」の家がありますが、新しいものは、「本2階造」といって、二階も一階と同じように使用できる構造です。

みよし写真館は、卯(宇)建(袖壁)や虫籠窓のある本二階造りで、宿場の面影ある、大正15年頃に再建された建物です。



【徳永家】屋号は綿嘉 河内木綿の間屋

京街道(文禄堤)

今もなお低い中二階の虫籠窓で、二階の両端に家紋入りの袖壁の卯建のあがっている建物です。



屋号綿嘉(わたか)で河内木綿やなたね油などを扱う問屋商人の徳永家

この辺りは、菜屋、綿治、綿嘉、あかねや、船長などの屋号がみられ、米、菜種、綿花等、この地方の農産物等の集散地で商業の中心地でもありました。

卯建(宇)とは、防火や、隣家との目かくしや雨よけです。一般には、借家は、卯建はあげることができず、卯建の上がった家に住めば一人前の成功者とされました。もう一説には、はりの上にあり、棟木をささえる短い柱(梶)で上から押さえつけられ思うように動けなく、なかなか出世できないとも言われます。

## 【来迎坂となら、のぎきへの道標】

下の写真は、来迎坂で、守口宿でも数少ない宿場時代の名残を感じさせる古びた石畳の坂道です。

### 奈 来 迎 坂

良 道



上の写真の左端にある石碑は、右ならのぎきと刻まれた道標です。この坂は、来迎町へも通じており、大名行列が鉢合わせなどの時は、この坂道を通り難宗寺へ避難したと思われる。



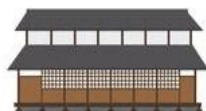
## 【五ヶ荘用水路跡】

水路跡  
説明板

五ヶ荘(所・庄)とは

- 守口荘 守口・高瀬・土居
- 小高瀬荘 大枝・世木・馬場
- 寺方 南寺方・北寺方
- 橋波 東橋波・西橋波
- 稗島荘

この地域は金気が多く、井戸の水は直接飲めません。そこで、淀川から直接水をひき飲料水・炊事洗濯・灌漑用水にも使用しました。



## 【北斗】菜屋

### 【旧中島屋跡】現小野山診療所

京 街 道 堤 の 町 (本町二丁目)

中島屋は開業当時は、世木屋とっていましたが、戦後もしばらく料理旅館を営んでいたが、奥さんが三洋電機の社長の奥さんの知り合いで、三洋電機に譲られました。今は診療所になっています。



## 【魚万楼跡】

魚万楼は、守口宿の旅館や茶屋の元締め役を果たしていました。

戦後も営業しており、年配の方でここで宴会などをしたとか、川舟で行ったという人の話も聞きました。

この魚万楼は慶長年間(1596 ~1614)に文禄堤の宿場のこの地に来て、「来又」という名で営業されたのが始まりです。しかし、江戸の初めから数えて14代の木村太郎氏までは連綿家業を営んでおられました。七代目の魚屋万右衛門が寛政5年頃代官に「しよくばいによぎようほつたんしよ食売女業発端書」を提出している。その後、一時差し止めになっていたが、再び飯盛女業が許されました。

※慶応4年(明治元年)明治天皇大坂行幸の時には華頂・仁和寺・両宮殿下、中山・おおぎまち正親町両大納言、さんじょうさねとみきよう廣畑内大臣、じじゅうちよう三條実美卿、岩倉侍従長、東坊侍従などが宿泊している。また、明治43年皇太子(大正天皇)が難宗寺で宿泊時、東宮職御用命により、さつま汁、鮎の塩焼きを献上しました。

五ヶ荘用水路跡

現在は、桃町緑道公園



「五箇樋跡」とは五ヶ庄（守口庄、小瀬庄、橋波庄、寺方庄、稗島庄）へ淀川から飲み水を引いていた水路の跡です。

### 【川東提灯屋】

川東さんの提灯屋は、江戸の昔からの建物で、守口宿の当時のままで商いを続けておられました。守口宿を歩くときはいつも寄らせていただき、ご主人から気さくに楽しいお話を伺ったものです。

以前は盛泉寺の前に、西田さんという提灯屋さんや、間の宿のあった佐太村にもありました。この地域は、佐太陣屋や来迎寺、菅相寺や佐太天満宮があり天神宮前より川向かいの鳥飼への渡しがありました。それで提灯の需要が多かったと思います。

しかし、ご高齢で後継者もなく廃業され、鍾馗さんのある古い建物もなくなり、とても残念です。今では北河内に提灯屋さんは一軒もないように思います。

電気がない昔は、旅人はいうまでもなく、生活に密着した必需品です。今でも冠婚葬祭や地蔵盆、村祭り、選挙などにも使われています。



守口市無形民俗文化財 寺方提灯踊り (グラフ守口No. 55)

本町二丁目(堤町)京街道 文禄堤

鍾馗さん



この絵は、一般的な鍾馗さんで鬼は、踏んでいません。



鍾馗さん「川東提灯屋」さんの庇(ひさし)に、二体の像が上がっています。これは、中国の伝説上の疫病神(やくびょうがみ)をはらう神といわれています。疫病よけや厄除けとして、屋根の上上げられました。川東さん宅の鍾馗さんは、寺の四天王像が天邪鬼(あまのじゃく)を踏みつけている鍾馗さんは、鬼を踏みつけた大変珍しい像です。鍾馗に似た五月人形などもつくられた時期もありました。



## 【札場】高札場

川東提灯屋さんから文禄堤を進と、現在の八島交差点の所にでます。守口宿の「高札場」はここにありました。高札場を札の辻ともよんでいました。高札は、街道の追分や渡船場、関所など旅人などの目につきやすい所に立てられ、守口宿のものは、長さ二間一尺五寸(約4m)、横幅五尺五寸(約1.5m)で、札が6枚かかっていました。札の内容は、幕府が出した法令などを掲示した立て札で、高札場には木版に御法度や掟などを墨書きにして揚げられていました。

バテレン(宣教師)を訴えろとご褒美に銀五百枚(三五〇両・三千五百万円)という大金がもらえましたが、訴えるものは誰もいなかったそうです。



現在の八島交差点のところに高札場があり、親子兄弟札、毒薬札、駄賃札、切支丹札、火付札などの幕府による高札(公儀高札)のほかに、各地の大名が独自に掲示する高札(自分高札)などの立て札がかかっていました。



京街道(東海道)は、この高札場の所から右折して、文禄堤から離れ、龍田通りへ出ます。このような曲がり角を「枳形」とか「曲尺手」と呼ばれています。白井家の前に出ます。



守口や門真地方は、低湿地ですが、守口小学校は少し高い所にあります。これは、大正4年(1915)に、文禄堤の上に建設されたのです。

## 【大塩平八郎と守口・門真地方】

### 大塩平八郎の乱

天保期に入るとますます世情が険悪になり、凶作は毎年のおこり、その上、特権商人が米を買い占め江戸へは米を廻し、役人は何の策もとらず、ますます大坂や近郊の人びとは生活苦に落ち、見かねた大塩は「町奉行に貧民救済」を願ったが拒絶されました。



大塩の学問は「<sup>ちこうごういつ</sup>知行合一」で、よいと知りながら実行しなければ本当の知識でない。そこで、大塩は学問どおり行動にでます。

まず、自分の蔵書を売り、668 両をつくり、1 万人ほどに 1 朱のお金と檄文(平八郎の願いの文)河内・摂津・和泉・播磨にくばって行動に参加するよう呼びかけました。当地方でも、守口町・世木・馬場・北寺方や門真三番・北島などの各村に投げ込まれました。大塩平八郎の乱に淀川左岸から多くの参加者がいました。しかし、乱が予定よりも早くなってしまい実際の参加者は少数でした。

この乱には、守口町や北寺方をはじめ近郊の村から39名の農民たちがかけつけました。乱が予定より早くなり参加者は少数でしたが、少し遅れて乱に加わった者は総勢 260 人ほどになりました。この頃守口町の人口は約 750 人ほどでそのうち男が 370 人で、その半数の 175 人が参加したとあります。守口町では年寄りや子どもを除いた成人男子がほとんど参加した事になります。

大塩平八郎の乱に淀川左岸から多くの参加者がいました。その理由は、平八郎の内縁の妻おゆうさんは、<sup>そねざき</sup>曾根崎の<sup>ようじよ</sup>茶屋の養女で、平八郎に嫁ぐことになり、茶屋と好意にしていた、<sup>こうい</sup>摂津国東成郡<sup>せつつのくにひがしなりぐんはん</sup>般若寺村の庄屋でもあり、<sup>もんてい</sup>洗心洞の門弟でもあった橋本忠兵衛の養女にして嫁がせました。守口町の白井孝右衛門らは早くから子弟となり、孝右衛門の子ども彦右衛門も幼いときから、内弟子になっていました。平八郎も時間があれば、白井家に陽明学の講義にきていました。<sup>きんりん</sup>近隣の<sup>ゆうふく</sup>裕福な農民たちも講義を受けに来ました。門真三番村の<sup>まつたぐんし</sup>茨田郡士は、60石の豪農で、白井孝右衛門の<sup>しょうかい</sup>紹介で、<sup>せんしんどう</sup>洗心洞に入門しました。また、同じ三番村の農業高橋九右衛門(23石6斗)も門下になっています。淀川左岸の<sup>ほうのう</sup>豊農たちが<sup>せんしんどう</sup>洗心洞に入門し、また寝屋川や枚方の豊農たちとも姻戚関係や知り合いでもあり、大坂への水陸の交通も便利で淀川左岸に集中したことが理解できます。

茨田郡士も高橋九右衛門も、天保 8 年(1837)2 月19日の<sup>きよへい</sup>挙兵計画には<sup>かめい</sup>加盟して<sup>れんぱんじょう</sup>連判状に<sup>けつぱん</sup>血判しています。門真の茨田郡士は、与力の<sup>せたさいのすけ</sup>瀬田濟之助と<sup>いんせき</sup>姻戚関係であったので、平八郎の乱後郡士の家<sup>に</sup>に濟之助一家が逃げ込んできていました。そこで、枚方にあずけたり、和州に逃がしてやったりしました。郡士はそのあと、自首して牢死したようです。茨田家は<sup>けつしよ</sup>欠所となり、そのあと再興されました。最後の当主茨田ひろさんが亡くなられたあと、堂山町黄梅寺のとなりあった屋敷は、今は茨田公園になっています。高橋九右衛門も自首しています。三番村のこの 2 人のほかに

も、7人が押込手鎖、北島村では20人が過料(軽い違反)叱りとなっています。

天保8年(1837)大塩の乱は幕府の直轄大坂でおこり、幕府に大きな衝撃を与えた、各地の農民や町人たちにも大きな影響を与え、“大塩門弟”“大塩味方”といった一揆が続発した。

## 【白井家】

白井家は、守口宿の村役人を務める名家、門真だけでも良田を20町歩を持ち、米蔵が建ち並ぶ豪邸で、大塩の乱で大坂焼きうちに用いた木製の太砲などは、この白井家の庭の松の木を切ってつくりました。また、古手屋を営んでおられましたが、いつ頃からか質屋も営む豊農でした。

この白井家は代々彦右衛門と名乗っていました。孝右衛門は世を息子に譲り彦右衛門を名乗らせ、自分は隠居しました。しかし何かあれば「彦右衛門親孝右衛門」とかかれています。

主人の白井孝右衛門は大坂町奉行の与力で陽明学者であった大塩平八郎(1792～1837)に早くから師弟の間柄で経済的にも援助していました。そんな関係から息子彦右衛門は幼くして内弟子になり、住み込ませていた白井家には、平八郎が講義したとされる書院がありました。(現在は残っていません)平八郎は、自分の蔵書1,241冊を売り668両(今の7～8千万円)をつくり、近郊の農民らに「檄文」と共に配りました。



白井家の隠居所で大塩兵平八郎が陽明学を講義したと伝えられる書院『グラフ守口40号』

白井さんを「隠岐」と呼ぶ理由  
次男の寅松は、まだ幼かったので15歳になるのをまって、遠島になり、着いた島が隠岐島でした。  
当時この島では、流罪人はそれなりの土産物を持参する風習があり島民も流罪人を引き受けを歓迎しました。船着場には草履が並び流罪人がはいた草履の家に引き取られ、そこで職を身につけ結婚し二人の子どもをもうけました。明治の終わりに突然寅松の長男が帰ってきて、数年後次男が帰り、その後寅松本人が立派な赤牛を一頭持って帰ったという話です。今でも近くの年配の人は、白井さんと言わずに、「隠岐」と呼んでおられます。  
『郷土史守口というところ』

白井孝右衛門は妻たつと2男2

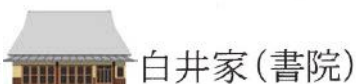
女の家族でした。白井孝右衛門は、大塩の乱に対して、500両ともいわれる経済援助をしています。しかし、乱に加担したということで、白井家も厳しく取り締まられ、孝右衛門は僧姿で高野山へ向かう途中、伏見で捕らえられ、あるいは、乱中捕らえられて打ち首になったとか、また、病死など諸説があります。長男の彦右衛門は遠島になったとか、牢死ともいわれています。次男の寅松は、まだ幼かったので、後に隠岐島に遠島になっています。書院は、現在は残っていません。

※乱後白井家はたくさん土地と屋敷は取り上げられ、納屋などが残されました。現在の家は、この納屋を改築したものだそうです。

## 【問屋場について】



京街道(市場町)



白井家(書院)



守口宿問屋場跡(直原玉青画伯作：守口文庫)  
大正4年(1915)まで守口小学校があったところ。

問屋は、宿場の公用事務をするところを「問屋場」と呼び、宿役人の長である「問屋」、助役の「年寄」、事務担当の「帳付」などが詰めています。「問屋」には、その宿の有力者が任じられることが多いです。

## 【問屋場の仕事】

幕府の公用旅行者や一般の旅行者に人足や馬、宿泊場所を手配したり、公用文書を運ぶ飛脚ひきやくの管理を主にしていました。

仕事は多面にわたり大変でした。特に「公務の旅する役人」などは、横柄おうへいな態度たいどをとり無理難題むりなんだいを言いますが、問屋役人も結構強く出たようです。守口宿の問屋役人は、問屋2人に、1人は3石5斗で幕府から支給され、もう1人は3石、これは宿方から支給されました。

このように、仕事のわりに報酬ほうしゅうが少なかったことがわかります。

## 【守口宿の問屋場】

本陣は、龍田通りたつた(市場町)今は自転車置き場になっているところです。問屋場はその前、白井家の隣にありました。

問屋場と本陣は対面しており、宿場の中心地で、宿場内の道幅みちのひろは二間半(4.6m)ですが、この市場は、大名行列や、荷物、人足継ぎなどをした所で、道幅も15m余りありました。今でもその広さがよくわかります。

宿場役人は3名、世襲せしゅうで、為太郎、五郎兵衛、庄屋弥兵衛、

年寄3名、六兵衛、長兵衛、喜兵衛他に、本陣・助郷総(惣)代・帳付・人馬差がありました。



東海道「藤枝宿」の問屋場の風景です。  
荷物などの継ぎ立てのようすです。

龍  
田  
通  
  
(市  
場  
町)

【助郷の起こり】時代が進につれ、文化も進み一般に生活も向上し経済的にも恵まれるようになると、参勤交代や役人の他にも一般庶民の旅行者や商人の行き来も増えました。同時に荷物などの運搬も増えました。

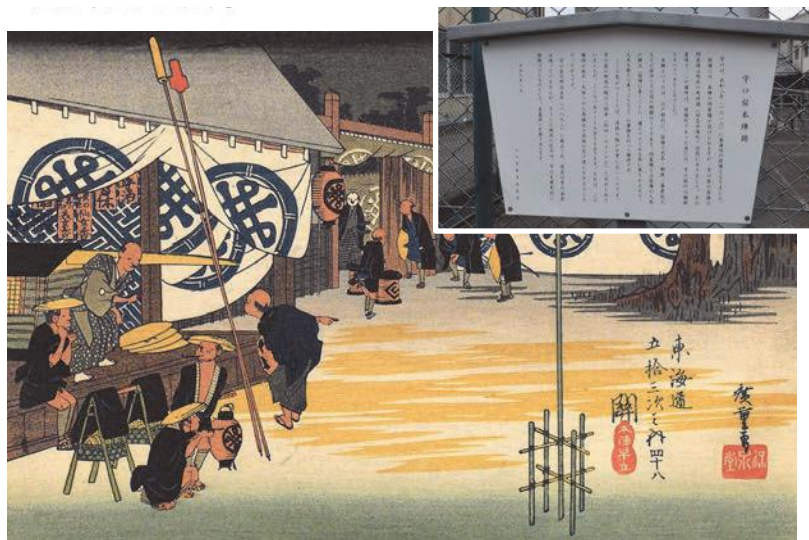
常備人馬だけでは人夫などが不足するようになると、宿場の近くの村から不足する人夫を出すように義務づけたのが、助郷で、助郷を出す村を助郷村といたしました。守口宿でも、参勤交代や、朝鮮通信使、長崎奉行、幕府の役人などの公用旅行者の通行のときには宿場の常備人だけでは不足します。そこで、守口宿では、元禄元年(1688)に、八番村、南十番村、北十番村、下島村の四ヶ村が定助郷になりました。これは東海道の宿駅で決して早いほうではありません。

上記の四ヶ村が、助郷は農繁期のときが多く、代官がかかわると、助郷の苦しさを申し出て、元禄3年には、今市村、上辻村、焼野村、般若寺村、南嶋村、江野村、別所村、土居村の八ヶ村になりました。

元禄7年には、土居村、大枝村、馬場村、世木村、西橋波村、門真三番村、門真四番村の七ヶ村にかわり、この七ヶ村が明治維新まで、つづきました。紀州家などの通行の際、多いときには千七八百人もの人夫が必要になり、そんなときには、大助郷(大助村、加助郷、大助、代助郷など)とって、3里以内の村から、後には10里へと拡大していきました。

守口宿 出勤人 足合計	内 宿 勤 め						" 助 郷 勤 め					
	小 計	御 証 文 人 足		賃 人 足		無 賃 人 足	小 計	御 証 文 人 足		賃 人 足		人 足
		江戸之 方へ	大阪之 方へ	江戸之 方へ	大阪之 方へ			江戸之 方へ	大阪之 方へ			
2,857.7	5,642.0	1,115.7	553.7	1,490.8	426.5	2,055.5	6,215.7	1,617.0	109.5	2,433.7	—	2,055.5

内宿勤めの人足(常勤)と助郷人足(非常勤)の従事した集計表です。大坂方面の高麗橋へは約2里(約8キロ)、江戸方面の枚方宿へは約3里(約12キロ)ありました。距離が短く楽な方が内宿勤め人足が比較的多いことが読み取れます。



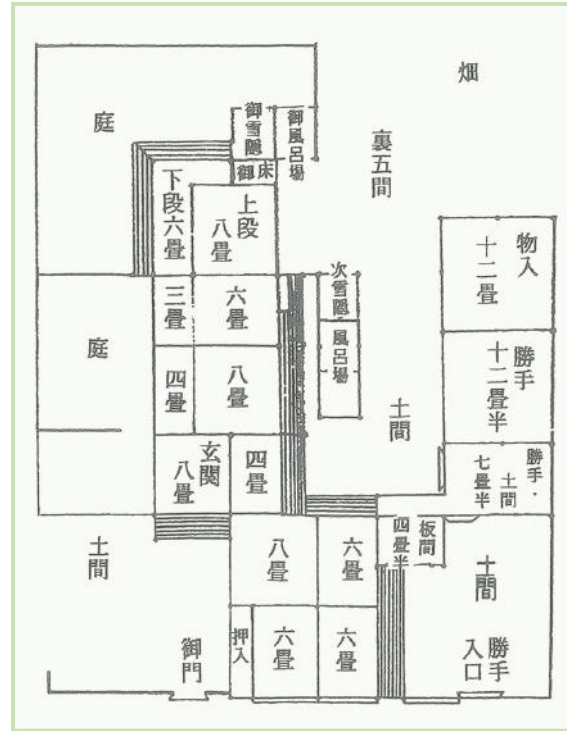
### 【本陣】

代々「吉田八兵衛」の世襲でした。跡に日本通運引越センターでしたが、今は自転車置場になっています。

起源は室町幕府第二代将軍足利義詮が休泊したのが始まりのようです。

ほんじん ちやくし ししや  
 本陣は、大名や勅使(天皇の使者)、  
 みやけ しんのう ほうしんのう もんげき  
 幕府の役人、宮家(親王、法親王)、門跡、  
 りゆうきゆうしせつ  
 琉球使節などが休泊する専用の宿で、  
 一般の者は休泊できませんでした。

守口宿には吉田八兵衛氏の1軒だけ  
 の本陣で、敷地は300坪で、建坪は150  
 坪でした。本陣は、宿役の重要な公的  
 設備で、高い家格(家柄)です。本陣の  
 かかく いえがら  
 あとをつぐときも、親類や問屋やその  
 しんるい  
 他の宿役人、宿の人足役などが話し合  
 ってきめ、その後、代官や本陣ともつ  
 きしゆうこう おおさかくらやしきづめ  
 とも関係のある紀州侯の大坂蔵屋敷詰  
 の役人に申し出て許可をもらいます。



守口宿本陣屋敷見取り図(吉田義明氏所蔵)



本陣での支払いは、大名などは、下賜(かし)といって御礼(祝儀)で、金 200 疋(1疋は 10 ~ 25 文)から金 2 両くらいであり公家などは、扇子や色紙、カルタなどの記念が多く本陣の経営は大変で本陣職の辞退を願いでたところもありました。

### 【難宗寺】 守口市龍田通り

じょうどしんしゆうほんがんに  
 難宗寺は、浄土真宗本願寺派(西本願寺)のお寺で、きげん  
 起源は、本願寺第八  
 せれんによしようにん えちぜんよしざきごぼう こうぜんじ  
 世蓮如上人が越前吉崎御坊を出て、枚方の光善寺をつくり、ここに3年間住  
 み、河内や摂津を中心に教えを説  
 いてまわりました。

この守口地方の足場として、  
 じつそん らいこうじ  
 実尊が建てたといわれる来迎寺  
 あと  
 の跡に、文明9年(1477)に守口御  
 坊としてつくられたのが難宗寺  
 です。また、1年後の文明 10 年  
 ふるはし みどうちよう  
 には、古橋御坊(現門真市御堂町  
 があるし  
 にある願得寺)ができ、この地方  
 にも教えをひろめていきました。



難宗寺の鼓楼(ころう)と道標、屋根は本堂。  
 向かって左が京都、右は奈良街道へ。

## 【東西本願寺の分立】

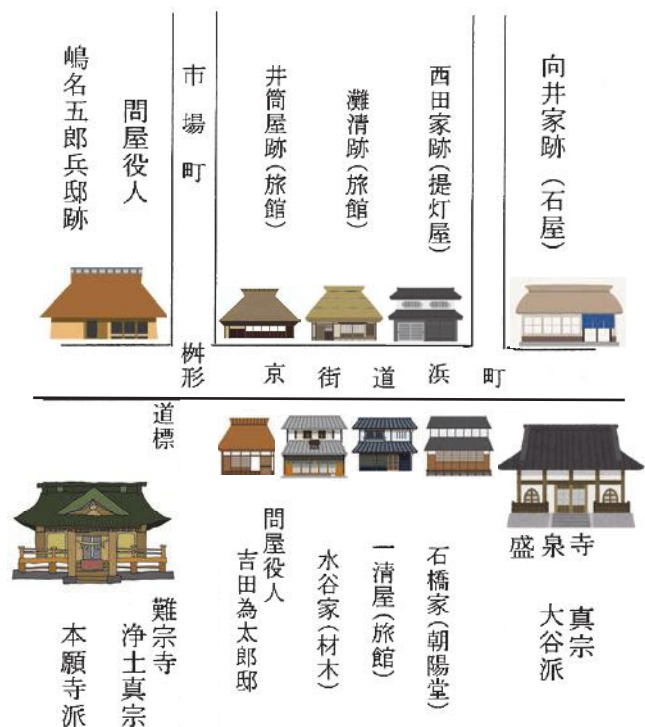
天正19年(1591)豊臣秀吉から京都六条堀川の地を与えられ、本願寺は再び京都に移りました。翌年十一世が亡くなり、長男の教如きょうによが第十二世になりましたが、その翌年、秀吉の後押しあともあって弟の准如じゆんによにかわって第十二世になり、教如は隠棲いんせい(現役を退く)することになりました。しかし、秀吉の死後、徳川家康が天下を統一し、慶長7年(1602)に京都六条烏丸に土地を与えられ、ここにもう一つの本願寺が建てられました。こうして教如の東本願寺と准如の西本願寺が分立しました。

## 守口けいちようでも慶長11年(1606)難宗寺と盛泉寺

菊田家(庄屋)・西田家(呉服屋)・石橋家(宿雁=菓子)の大地主らが守口御坊すなわち難宗寺(西本願寺派)に残りました。一方、白井家(質屋)・徳永家(守口漬け)・水谷家(木材屋)を中心に資金を持ち寄り、守口坊より本尊を譲り受け浜町に新寺院がつけられました。それが、真宗大谷派の盛泉寺です。小作人たちは、一軒おきに難宗寺と盛泉寺の檀家になりました。



難宗寺鼓楼の前にある道標で京街道に面しています。「すぐ守口街道」「すぐ京街道」とあります。御行在所は天皇の仮御所で、天皇が宿泊された所です。御假泊所とは大正天皇(当時は皇太子)が父明治天皇の若き日のご苦勞を偲びたいとのことで、仮泊されたところです。



## 【明治天皇の大坂行幸】

慶応 3 年(1867)10月徳川慶喜が<sup>とくがわよしのが たいせいほうかん</sup>大政奉還し、明治新政府が成立しました。

しかし、慶応 4 年 1 月 3 日に伏見・鳥羽の戦いがおこり、幕府軍は敗れ大坂城に逃げました。

1月7日には、將軍慶喜を討つための<sup>せいとうしようぐん</sup>征討將軍に<sup>にんなじのみやよしあきらしんのう</sup>仁和寺宮嘉彰親王が命令され、9 日には大坂城を<sup>せんりよう</sup>占領し、翌日には、<sup>さつまはん</sup>薩摩藩兵をひきいて大阪の本願寺<sup>きたみどう</sup>(北御堂)を<sup>かけしよ</sup>掛所とし<sup>ちゅうりゆう</sup>駐留しました。

薩摩藩士の大久保利通は、慶応 4 年 1 月 23 日、新政府の参与になり、大久保利通は大坂に都をうつす<sup>せんとう</sup>遷都の<sup>けんぱくしよ</sup>建白書という意見書を出しました。

大久保利通や<sup>きどたかよし</sup>木戸孝允は<sup>さねとみ</sup>三条実美、<sup>いわくらともみ</sup>岩倉具視らとむすび新政府をにぎり<sup>じんしん</sup>人心を<sup>いつしん</sup>一新することと、<sup>けんい</sup>明治天皇の<sup>けんい</sup>權威を国民に見せるために、幕府を討つことを名目に大阪行幸を計画しました。その訳は、<sup>くぎよう</sup>公卿や寺社勢力のつよい京都から、水陸交通の要所であり、経済も中心地である大阪に都を移し、天皇中心の国家をつくろうとしました。しかし、<sup>ちやうてい</sup>朝廷の内部の反対がつよく大阪へ都を移すのは実現しませんでした。大阪への<sup>ぎようこう</sup>行幸はきまりました。最初は 2 月の初めでしたが、天皇の病気で3月5日に<sup>えんき</sup>延期されました。さらにこの日も延期になり、結局3月20日に、<sup>ししんでん</sup>紫宸殿で<sup>しやか</sup>車駕(天子の乗る車)<sup>しんせい</sup>親政(行幸)の式がおこなわれ、21日に天皇は<sup>そうかれん</sup>惣華輦にのり、<sup>ぎじよう</sup>議定博経親王・副総

裁<sup>さねとみ</sup>三条実美・<sup>ほひつ</sup>輔弼<sup>ただやす</sup>中山忠能ら以下 29 人が、馬にのったり、地下(身分の低い者)の者は軍装して従いました。また、広島藩以下の 7 藩の兵が<sup>さきが</sup>先駆けし、長州藩以下の 8 藩の兵が<sup>しんがり</sup>殿をつとめました。

当日一行は、<sup>けんれいもん</sup>建礼門を出て、<sup>きこくてい</sup>東本願寺の<sup>きこくてい</sup>枳殻邸で小休止し、



石碑は明治天皇が慶応 4 年(1868)3 月 22 日、大坂行幸のとき御行在所となった「明治大帝聖跡」碑です。

出発の頃に雨模様になり、鳥羽<sup>とば</sup>の城南宮<sup>じょうなんぐう</sup>で昼食をとり、この日は八幡で一泊です。

3月22日、八幡をたち、楠葉<sup>くずは</sup>で小休止をして、枚方で昼食<sup>しよくさん</sup>(食餐)。つづいて佐太神社で小休止しました。佐太神社を出発のころから雨模様になり、夜8時頃に、今夜の宿泊地<sup>あんざいしよ</sup>の行在所になる難宗寺に到着しました。西本願寺<sup>みょうによしようにん</sup>の明如上<sup>みょうじやう</sup>人らがお迎えしました。

内侍所<sup>ないじどころ</sup> (賢所<sup>かしどころ</sup> = 神鏡、八咫<sup>やた</sup>の鏡)は100mほど東の盛泉寺<sup>じょうせんじ</sup>です。翌3日目の3月23日は、午前7時頃明治天皇は明如上<sup>みょうじやう</sup>人も同行し、難宗寺を出発。この日も朝から雨であったので、警備<sup>けいび</sup>も大変でした。11時頃に八軒屋<sup>はっけんや</sup>に着き、昼食後、午後1時頃に西本願寺掛所<sup>かけしよ</sup>に入りました。

天皇は1ヶ月半におよび滞在し、<sup>うるう</sup>閏4月7日に大阪を出発しました。帰りは淀川を船で上りましたが、天皇のシンボルである八咫<sup>やた</sup>の鏡は、帰りも盛泉寺<sup>ないじどころ</sup>が内侍所となりました。



明治天皇の大坂行幸の時に内侍所となり、帰京の時は船便であったが、明治天皇は「朕はどうあろうと、取り返しはつくが神器はもしものことがあっては」と帰りも三種の神器の八咫鏡の内侍所となった。写真は盛泉寺本堂前「内侍所奉安所址」の碑。

行列に際して、京阪地方<sup>ふごう</sup>の富豪たちに命じ、総数10万両を献金させ、8kmの大行列でした。

明治元年(1868)には東京遷都<sup>せんと</sup>となりました。大正元年(1912)9月に、大

阪の知事や商工会議所会頭らが中心になり、聖跡保存会ができ。佐太天

神には、その時、玉座に使用された畳は大きな木箱に入って保存され、難宗

寺にも当時の玉座も保存されています。盛泉寺が内侍所になり、前の庭を約3mほど掘り清めた淀川の砂で埋め立て寝殿を建てました。賢所<sup>へいじゆうもん</sup>が高くお寺の門からはいらなかったなので、堀重門と呼ばれる門を新につくりました。

【問屋役人 吉田為五郎邸】 浜町の角にあります。現在でも、その子孫が同じ所で、不動産業を営んでおられますが、その昔は、漢方薬局「吉田長寿堂」で、「木薬屋」と呼ばれ親しまれていました。安永年間(1772 ~ 80)にコロリ(赤痢)が流行したとき先祖の源兵衛さんがつくられた「葛根湯」や「あかぎれ軟膏」などがよく売れました。

## 【石橋家 大和屋（朝陽堂）】守口宿の名菓 「宿雁」

宿雁しゆくがんとは、落雁らくがんにあんこが入ったお菓子です。しかし、戦時中砂糖が不足し、生産を中止しました。この菓子の由来は、享和3年(1803)安芸あきの在家ざいけに育って、石山寺で修行して名僧じょうんになった似雲さいぐんが、西行法師さいぎょうほうしの事跡探求じせきたんきゆうのために諸国あんぎやを行脚中に守口を通りかかったとき、丁字屋ていじやの隣にあった石橋家の出店の茶店に立ち寄ったとき、ふと床下ゆかしたで泣く雁かりの声を聞き、茶店の主人にそのわけを尋ねると、羽をいためて草むらあわにいたのをかわいそうに思いひろうて飼っていたと聞かされました。それを隣れみ次あわのような和歌をよみました。

帰るべきと　こ世の国を床の下に  
おもい出してや雁の　啼なくらむ

宿雁という菓子の名は、この和歌にちなんでつけられたものです。

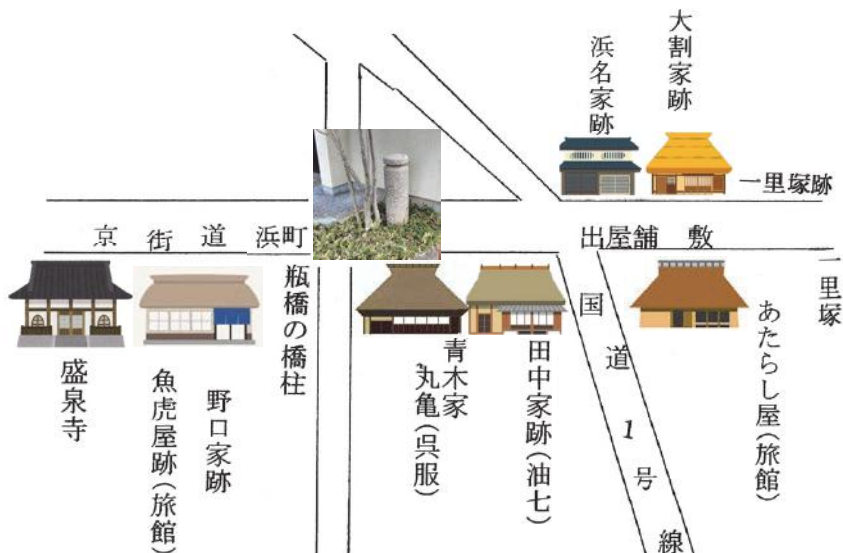
【盛泉寺】守口市浜町 1-5-2。にある盛泉寺は真宗大谷派(東本願寺)寺院です。

白井家・水谷家・徳永家の大地主が中心になって、慶長11年(1606)本堂は難宗寺に残し、本尊(阿弥陀立像)を持って、浜町に教如上人が新



盛泉寺(真宗東本願寺派)の塀重門(へいじゅうもん)お羽車はここを通しました。

寺院を建てたのが盛泉寺の始まりです。その後、兵火や水害などで破壊しましたが、現在の本堂は天保6年(1835)に、その他の堂は天保11年さいこんに再建されたものです。慶応4年(1868)3月22日、明治天皇が大阪行幸ぎようこうのとき、宿泊は難宗寺、盛泉寺は、内侍所ないじどころすなわち賢所かしどころとなり三種の神器じんぎが置かれたところです。明治天皇は帰京のときは船でしたが、三種の神器は陸路のため、盛泉寺が賢所かしどころとなりました。



守口宿北側の一里塚址(直原玉青画伯作)宿場のあった当時は両側に一里塚がありましたが、現在はすっかり変わりましたが、片側のみ記念碑が建っていますが、上の見附があったところです。

この辺りはすっかり建て替えられ、昔の<sup>おもかげ</sup>面影がありませんが、国道1号線に近づく<sup>きょうちゆう</sup>と、「かめばし」「大正4年・瓶橋」と書いた<sup>きょうちゆう</sup>橋柱が2本残っています。水路は今<sup>あんきよ</sup>は暗渠になっています。この辺りまでが宿場ができたころの守口です。

ここから先は出屋(敷)といって、江戸時代になってからできた町のようにです。

この瓶橋のように東海道に架かる橋は、すべてが公儀橋<sup>か</sup>といって幕府の手で工事をする<sup>ばくふ</sup>おくにえきぶしん国役普請といたしました。

当時の多くは板橋の木造の橋でしたが、この瓶橋は大正になって町民の希望で庄屋の菊田さんによって石橋に架け替えられました。瓶橋の由来は、「口を守ること、<sup>かめ</sup>瓶の如し」これはかめが水をもらさぬように、口をかたくとじること<sup>ごと</sup>です。「発言を慎<sup>しんちよう</sup>重にするべし」。「すなわち一度口に出すとひっこめることはできないと言った。」(朱熹・<sup>しゆうき</sup>敬斎<sup>けいさいしん</sup>箴)の語を当時守口を支配していた代官が命名したといわれています。



瓶橋は「口を守ること瓶の如し」を「守口」にかけて命名されました。もとは板橋でのち土橋になりました。

【青木家】

青木家は屋号を丸亀<sup>つし</sup>といって呉服商を営んでおられました。家屋も厨子二階の<sup>まかべ</sup>真壁造りで、呉服を営んでおられた関係で、<sup>てんまど</sup>天窗が二ヶ所もあり、<sup>かんき</sup>換気のよい家でしたが、最近建て替えられ、もう見るできないのが残念です。

## 【一里塚】

国道1号線をこしたところが出屋敷といって、江戸時代になってからできたところで、ここに新屋という旅籠屋がありました。守口宿は脇本陣はありませんでしたが、何かのときには、魚万楼などとともに新屋が脇本陣の役割をはたしていたようです。

ここを少し進むと「一里塚」です。江戸時代、街道に一里ごとに目印とし一里塚を築きました。旅人にわかりやすく一里ごとに、両側に一里山として高く土を盛りました。

『徳川実記』に「36町を一里と定め」、一里塚は「五間四方ナリ…」とあります。

一里塚は、旅人たちによく目立つように一段と高くし、そこに年中茂っている大きな木を植えました。多くは榎です。本当の理由はわかりませんが、家康が担当役人に「よい木を植えよ」といったのを「エノ木」を植えよと聞き間違えたともいわれています。

旅人の距離の目安にもなり、また、人馬や駕籠料金なども一里塚でいくらと定められました。もちろん宿場間の料金の場合もありました。

暑いときはこの木陰で休憩もしました。

またここには、守口宿の出入口として「上の見付」があり宿場に入る旅人を調べる検問所がありました。

守口宿にも大名などが休泊したり、通行するときは、身分によって違いがありますが、本陣の主は袴や羽織り袴姿で、その他、問屋や庄屋など宿場役人らもこの検問所のある一里塚（見付）まで見送りました。



一里塚は守口への入り口でもあり、出口でもありました。この碑は昭和40年に守口市によって建てられた一里塚の碑で広さは20坪ほどあります。



一里塚を過ぎ、守口小学校の前を通る京阪本通りに出て、北に向かって少し進み北斗町を左折して八雲小学校の後ろ側に出ます。旧京街道が八雲小学校の建設のため街道が吸収されてしまいました。

そこに道標どうひょうがありましたが、その道標を、八雲小学校の玄関正面に移されました。

### 【光明寺】守口市八雲北町 2-23-20

京街道を北へ5分位歩き、西へ約500m進みますと光明寺こうみょうじがあります。

当寺は、正法山かんきいん歎喜院しんといて、真言宗御室派ごんしゅうおむろはにんなじ仁和寺まっじの末寺です。

樟くすの材質ざいしつで高さ112.7cmの一木造りいちぼくづく「十一面観音立像じゅういちめんかんのりゆうざう」があります。これは、重要文化財に指定されています。

当寺に聖天堂だいしょうかんだしがあり、大聖歎喜自在天だいてんほんぞんが本尊で、聖天さんやまいのぞといて「病を除き夫婦仲良く子が授かる」といわれ、旅人もここにお参りして行ったと思われま。



### 【八雲神社】守口市八雲北町 2-15-1

光明寺は宮寺でした。祭神は、牛頭天王ごずてんのう(素戔鳴尊すさのおのみこと)・八幡宮(応神天皇)・天満宮(菅原道真)の三神で三社権現さんしやごんげんといわれているようです。

秋祭りには山車だしが、八番・北十番・南十番・下島の旧4ヶ村の4台であったが新たに八雲中町が加わり今では5台の山車が出ます。



#### 光明寺

本尊の十一面観音立像で、樟財(ハルニレとも)で、角味と、丸味のある波が交互に規則正しく彫刻された鬘波式(ほんばしき)といて平安初期(弘仁・貞観文化)の持つ刻法です。

また、像は右手が垂れ下がり、左手を上げて蓮華瓶を持つ姿が長谷式様式ともいわれています。なお本尊の十一面観音立像は国の重要文化財に指定されています。



(グラフ守口No. 37)



八雲小学校校庭にある道標。八雲小学校の工事で、京街道にあった「左大坂」とある道標を、八雲小学校の校庭に移転して保存されています。

### 【正迎寺】

京街道を突き当たると、浄土真宗本願寺派しやうこうじの正迎寺があります。

当寺は、南朝方なんちやうかたの武士であった那須又五郎為成なすまたごうつためなりが観応元年(1350)に存覚上人ぞんかくに帰依(仏や神を信仰し、その力によること)し、寺を建てました。また、八雲遺跡から出土した五輪塔が保存されています。境内には「親鸞上人立像」があります。

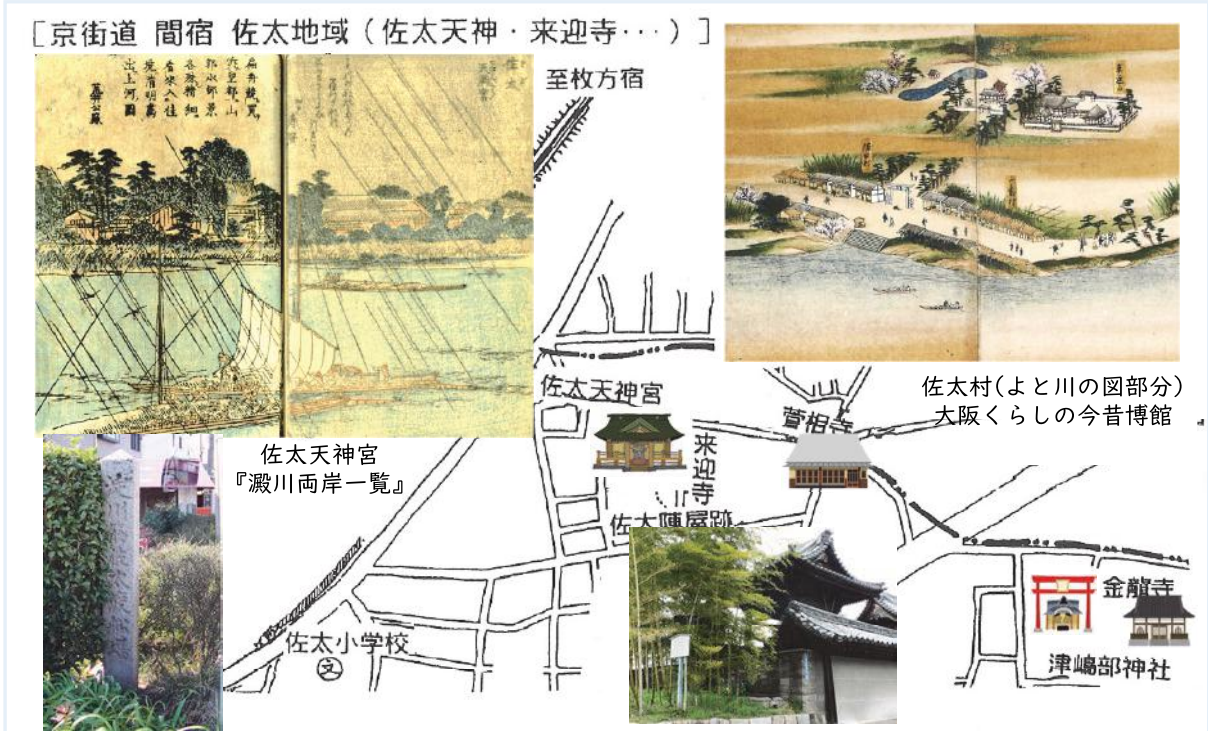
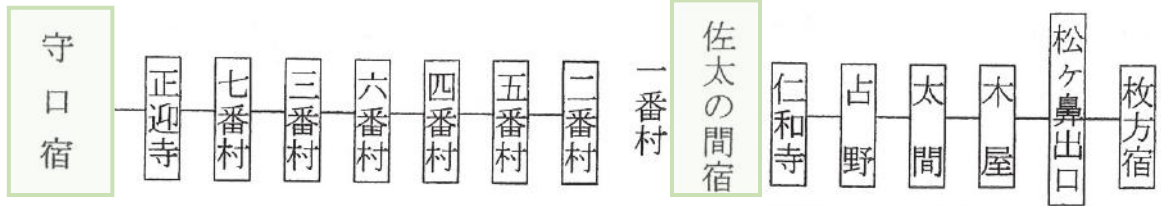
京街道は文禄堤へ



(正迎寺)

八坂瓊神社

さ た あいのしゆく  
【佐太の間 宿】



正迎寺の所より、文禄堤の各村を通り、佐太の間 宿に着きます。間宿は、宿駅(宿場)と宿駅の間に設けられたところで、間 村ともいいます。間宿は、幕府が認めた正規の旅人の休憩所です。

佐太の間宿は、枚方宿と守口宿の間に設けられていました。200 年程前の享和元年につくられた、『河内名所図会』の、佐太天神宮のところに、「佐太にあり、此 所京街道にして、茶店、貨食屋あり…」とあります。

このように間宿は、茶屋の外にも旅に関係した品物やいろいろな物を売る店があったところです。

他の村に比べ、町屋が形成され、この地方の中心地でもありました。

宿場は、人足をはじめいろいろと御用を務めていますが、しかし、間宿は「御用も務めないで、旅人の宿泊をさせることは禁止しました。」これは幕府が、一般の宿場を保護するためです。

しかし、特別に依頼のあった場合は、例外的に宿泊させることはありました。

この間宿は、他の農村などとは違った職業構成がみられます。

幕府は延宝 6 年(1678)これまでであった茶屋の他に、新しい茶店を営業することを禁じたり、茶店は茶立女ちやたておんな(むすめ)(娘) 2 人より多く置くことも禁じました。また、その他に妻や嫁などを馳走ちそうとって、客をもてなしたり、みだりに女が馳走に出たならば捕らえて奉行所へ連れていかれました。

給仕女の服装も、木綿に限られました。茶屋の茶立女に旅籠屋の飯盛女めしもりおんなとおなじようなことをしないように茶屋での宿泊をさせることを禁じました。

佐太の間宿 は、元禄元年(1664)の村明細帳むらめいさいちようによりますと。

惣家数 67 軒 寺院 2 ヶ寺 道場 1 ヶ寺 神主 1 軒

惣人数 284 人 男 132 人 女 149 人 僧 2 人 神主 1 人

その内訳

1、医師 1 人

1、職人 7 人

紺屋 1 人 石屋 1 人 桶屋 1 人 指物屋 2 人 左官屋 2 人

1、商売人 23 人

1、搗米屋つき 1 人

1、小売酒屋 2 人

1、質屋 2 人

1、豆腐屋 1 人

1、煙草屋 1 人

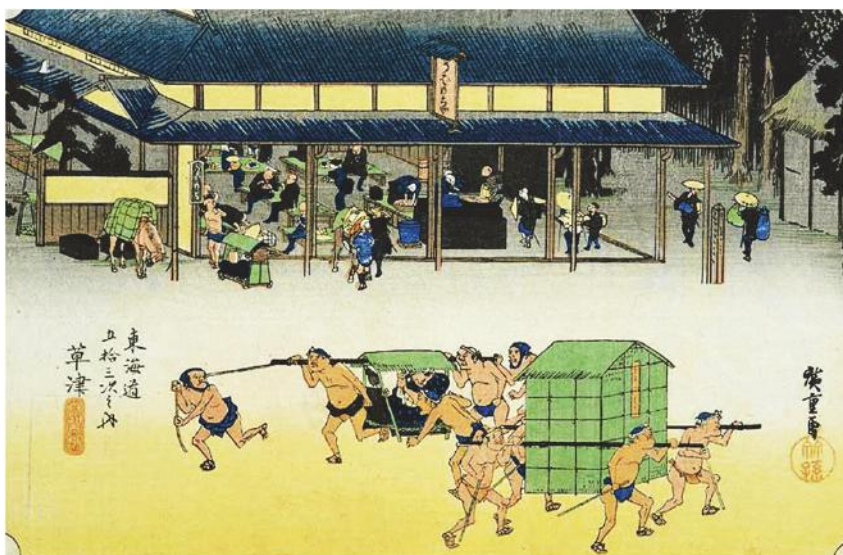
1、水茶屋 5 人

1、菓子屋 1 人

1、果物屋 7 人

1、湯屋 1 人

1、髪結職 2 軒



東海道五十七次草津宿の茶屋の様子です。草津宿は中山道の分岐点で茶店も大変にぎわっていました。守口の茶屋には宿雁(しゆくがん)という銘菓がありました。

街道には間宿の他にも、宿の端に数軒の茶屋や、間宿にも立場という旅人の休憩所があり、茶屋や食事をする店なども開かれた。「立場茶屋たてばちやや」がありました。

当時の旅人は楽しみの一つに名物の食べ歩きもありました。守口の宿雁、枚方は餠餅、伏見では駿河屋の錬り羊羹、逢坂山の走井餅、大津の力餅ち、草津の姥が餅…などがありました。

佐太は古くから開けた地域で佐太天神や来迎寺など大坂や京都からの日帰りができる、今で言う観光地でした。また、摂津の鳥飼村への「佐太の渡し」などもありました。

### 【菅原道真と佐太天神宮】 守口市佐太中町 7-16-25

道真は、宇多天皇の信頼をえて、「とんとん拍子で右大臣まで出世し、また、娘婿である皇弟齋世親王を天皇にしようとしている」とか、藤原時平の「嫉妬」と「裏切り」で延喜元年(901)太宰権師に左遷されました。その2年後亡くなりました。



水鏡池の池畔にある直原玉青画伯の筆による句碑



窓の灯の 佐太まだ寝ぬ 時雨かな：与謝野蕪村  
佐太天神宮のあたりは渡しもあり、とても賑わいました。

佐太天神について、当社の『略史』によると道真公死後、約50年後の天曆年間(947~57)里人がその徳をしたって道真公の残した「自作の木像」を御神体としてお祀りしたのが始まりです。中世の様子はあまりわかりませんが、その後、河内の国茨田郡大庭庄の惣社となり、天正8年(1580)小出播磨守秀政が社殿を再興し、2代目吉政が千花千句の連歌を奉納しました。

慶長期に永井信濃守尚政が天神絵巻を見て、天神をうやまうようになり、本殿、拝殿、神門、鳥居などを造営しています。

○天神縁起(北野天神縁起絵巻) ○慶安三庚虎歳2月25日銘の淀屋右衛門が寄進した石井筒 ○菅原伝授手習鏡と白太夫(佐太の社)

このほかにも佐太天神にはたくさんの宝物があります。

【来迎寺】 守口市佐太中町 7-11-17

しうんさんしやうじゆいんさたらいこうじ  
紫雲山聖聚院佐太来迎寺 浄土宗佐太派の本山は本尊の天筆如来です。

当寺は清和天皇の貞観元年  
(859)奈良大安寺の行教上人が、  
九州の宇佐八幡宮に国家の安全を  
祈り、その満願の日行教上人の袈  
裟の上に、仏さんの姿が写された  
のが「天筆如来」で、石清水八幡  
宮の御神体とされました。それを  
法明上人が授かり、さらに弟子の



佐太来迎寺『河内名所図会』巻之六

実尊が授かり、自分の生まれた大庭の庄で正平2年(1347)に寺が建てられ、  
当寺は浄土依準大念仏宗の本山として、守口市来迎寺町にありました。来  
迎寺独特の相続法により各地に移転すること26回、延宝6年(1678)三十世  
慈光上人の時に守口市梶より現在の地に移りました。

後村上天皇より、釈迦如来像や仏具など寄進されたものを、本堂に安置し  
て、本堂を放光殿と名付け、後村上天皇の勅願寺となりました。

- 石清水八幡曼荼羅図(重要文化財)
- 十一面観音立像(木像 平安時代中期)
- 釈迦如来立像(鎌倉時代初期)
- 後村上天皇ご真影 ○幽霊の足跡
- 鳳凰文鎌倉彫香合
- 石造十三重塔(鎌倉時代・府重要美術品)当寺



幽霊の足跡

来迎寺の幽霊の足跡  
寛保三年のお盆の十四日の夜、来迎寺の  
慈光上人が念仏を唱えていると、一人の女  
性が来て、「私は江戸小網町の主人の妻の  
お石と申します。主人は私が死んでも家を  
あけてお供してくれず、あの世へも行けず困っ  
ております。幼い頃、ご開帳で天筆如来さま  
と上人にたのみました。どうか回向をして下さい」  
と哀れに思った上人は、お石さんに心光清  
蓮という法名をさずけて、念仏を唱えまし  
ごの向で、迷いは覚めました」といって、  
そのお札に座具に足跡を残したと、  
とへ旅だったそうです。一  
跡です。

には、その他にも多くの宝物 があります。

十三重塔の下層部にある四方仏の一つ阿弥陀仏



石造十三重塔(層塔)には「嘉元(1304)年11月13日講  
衆40余人」の名があり、初層部に薬師、弥勒、弥陀、  
釈迦の四方仏が彫ってあります。

【菅相寺】 守口市佐太中町7-16-4

香林山王蔵院 そうとうしゆうこうしやうじ 曹洞宗興正寺の末寺

行基が建てたといわれる、佐太天満宮の宮寺で、江戸時代に永井尚政なおよまさによって興正寺派の寺になりました。観音堂には立派な十一面観音菩薩があります。永井氏の菩提寺になっています。



【佐太陣屋と永井家】 守口市佐太中町7-5-2

淀城主初代松平定綱(3万5千石)について永井信濃守尚政が入城し、同じとき、弟直清が高槻城主となり、兄弟で淀川の両岸の守りを固めました。

しかしその後、永井氏は、岐阜かとうの加納に移っていましたが、この地域に1万2千石を持っていました。

宝永元年(1704)に枚方なぎさの渚(御殿山)より、この地に代官所だいかんしよを移しました。ここは、大庭一番村、梶村、太間村、下馬伏村で、ほぼ3千2百石で、代官所の敷地は約5,000坪ありました。

この佐太は京阪間の交通や軍事用の要地であるので、譜代大名の永井氏の代官所を移し、大坂くわやしきの蔵屋敷もかねていました。

年貢米はもちろん、加納藩の経済をささえるために、特産物として、提灯や傘などを売ったり、タバコなども作っていたようです。朝鮮通信使などがこの地域を通過するとき、この佐太代官所より指示が出ていました。

文化11年(1814)には牢屋敷もつくられました。代官所跡は、かつて守口市の佐太老人福祉センターがあり、施設の裏庭うらにわには、石垣の一部や刀を洗ったと言われる井戸も残っています。

※加納藩じようきやうねんかんでは、貞享年間(1684~87)にはすでに、陣屋の一部は移していたとあります。

佐太陣屋跡の見取図  
旧：佐太老人福祉センター(佐太中町)



# 東海道五十七次守口宿 守口事ごよみ

作詞／山瀬 いづみ 補作詞／松本 成子 作曲／たきのえいじ 歌／松本 稔

一、江戸から数えて 五十と七つ

ここは守口 宿場町

今は昔の 文禄堤

歩いてみたい あのひと

遠い幻 追うように

二、さつき花咲く 夢待ちの宿

かわす盃 差し向かい

あなたの胸に 心を染めて

暦をめくる はなれ茶屋

秘めた思いに 紅を差す

三、暮れる水面みなもに 街並み揺れて

流れ尽きない 淀の水

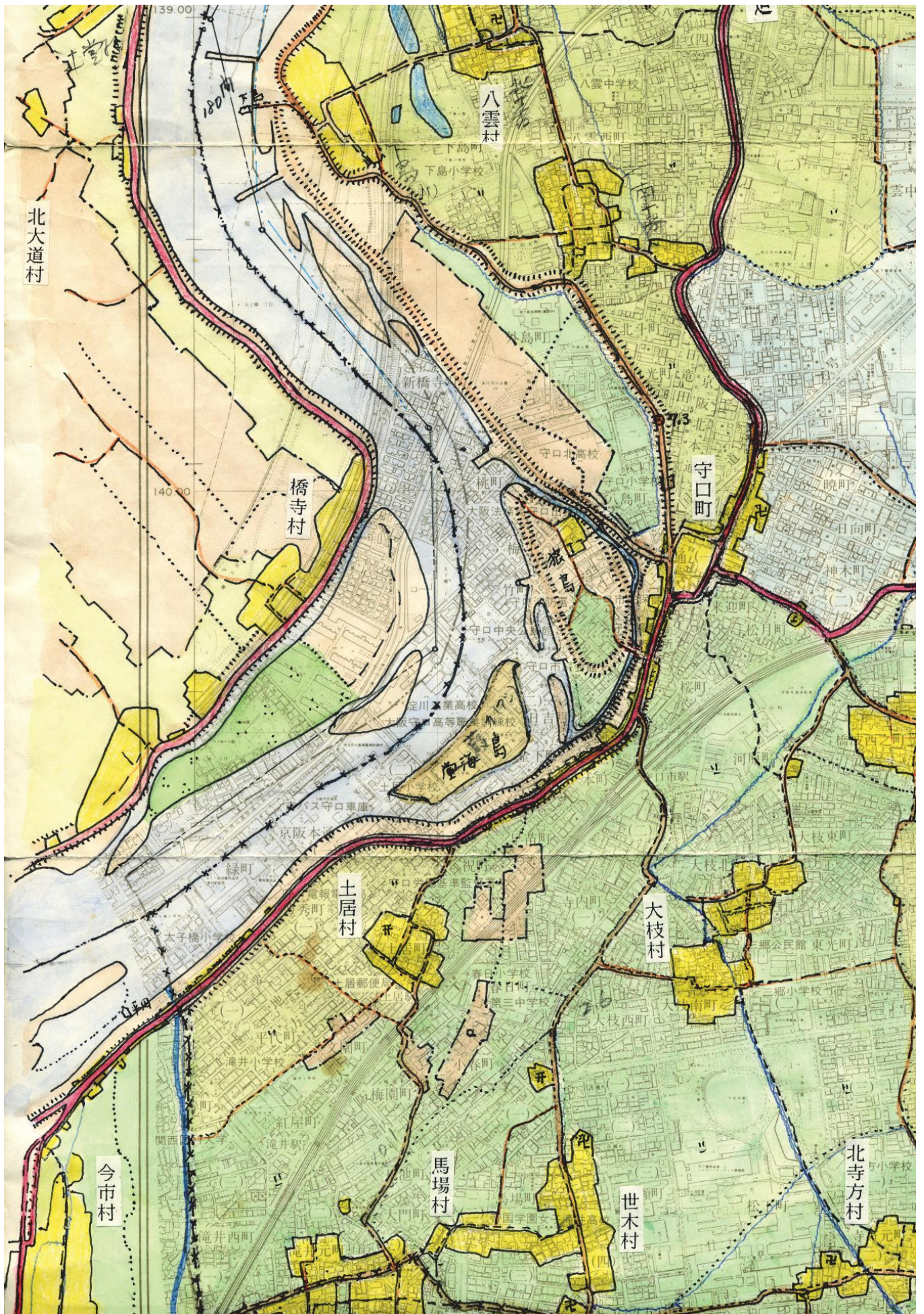
私の願いを 小舟に乗せて

そつとあなたに 届けたい

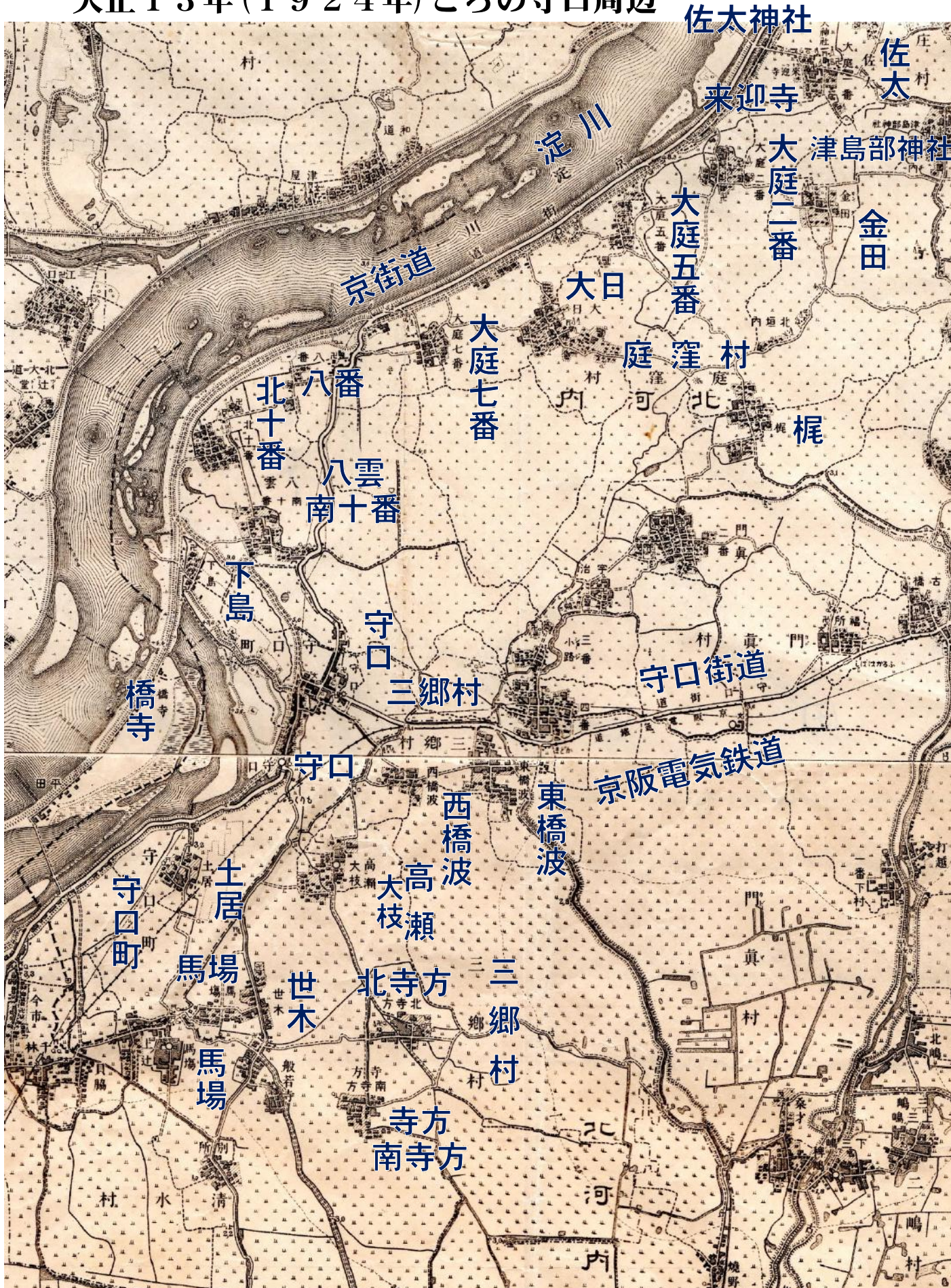
面影しのぶ 旅の宿

The musical score is written in G minor (one flat) and 4/4 time. It consists of seven staves of music with lyrics underneath. The lyrics are: えどから かぞえて ごじゅうとなな / つここは もりぐちしゅ / くばまーち いまは / むかしの ぶんろくづつ み / あるいてみたい あのひとと とおい / まほろし おうーようーに

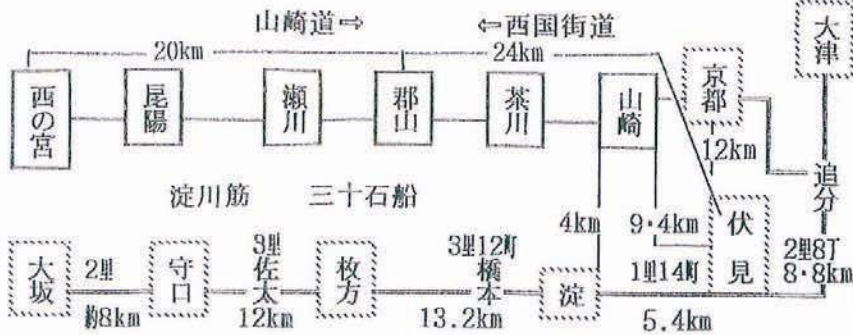
# 旧守口町の明治18年(1885年)ごろの古地図 (現代の地図と合成)



# 大正13年(1924年)ごろの守口周辺



この地図は大阪教育大学社会科山田地理研究室が社会科地理教育のために国土地理院発行の2万5千分の1地形図を国土地理院長の承認を得て複製、作成した地図教材です。学習教材として地名などを大きくわかりやすく併記しています。



京街道→ ←西国街道  
京街道(大坂街道)の宿駅間の里程図

文禄堤  
 問屋役人宅(跡も)  
 本陣跡  
 宿場時代の旅籠や商いをしておられたと思われる家  
 宿場時代にあったと思われる家  
 宿場時代よりある。または、あると思われる建物



明治43年(1910)付替完成



うだつ  
 今も宿場時代の街並みを残す本町(堤ノ町)かいわい、屋根が低い中二階の厨子造りと、宇建(卯建)のある町、道幅は2間半(約4.6m)  
 (写真はグラフ守口 NO55)



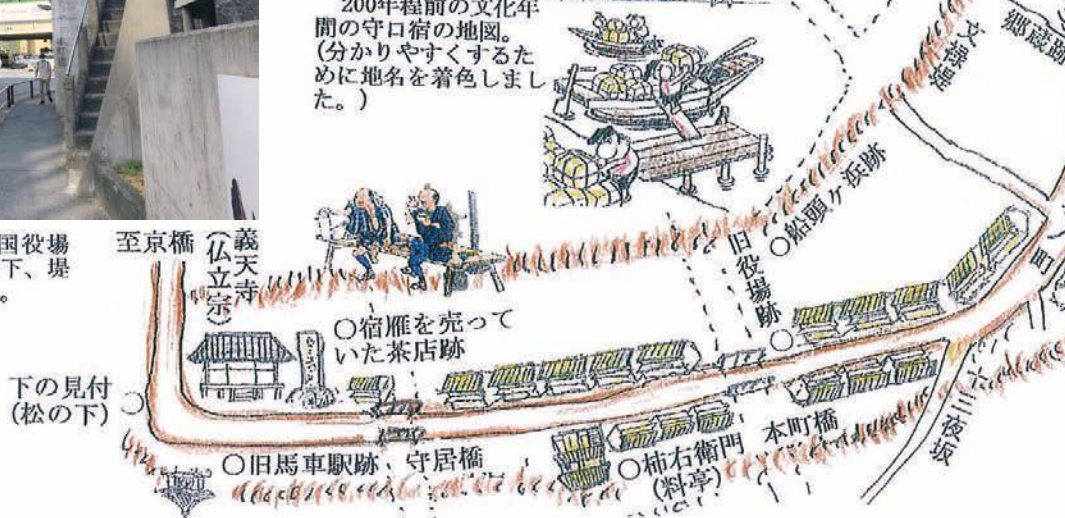
宿場時代の建物で、宿場当時と同じちようちん屋を営んでいる店。



豊臣秀吉が築堤した御国役場(文禄堤)に架かる本町の下、堤の高さなどがよく分かる。



200年程前の文化年間の守口宿の地図。(分かりやすくするために地名を着色しました。)



白井家の郎のゆかりを講義し

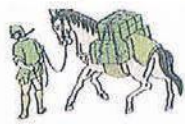
水路跡  
 地下鉄守口  
 淀川  
 旧堤川

東海道『京街道四宿』間の御定駄賃・人足賃銭

『宿駅』見玉幸多著参考

『京街道四宿』宿間までの 駄賃・人足賃銭(文)	大坂～守口 2里	守口～枚方 3里	大坂～枚方 5里	枚方～淀 3里	淀～伏見 1里14丁	伏見～大津 4里8丁
正徳元年(1711) 乗掛荷物人足 天保15年(1844)	—	—	263文	151文	53文	179文 弘化元年 265文
正徳元年 軽尻馬1疋 天保15年	—	—	165文	95文	35文	113文 弘化元年 168文
正徳元年 人足1人 天保15年	44文	68文	125文 天保14年 167文	73文	26文	84文 弘化元年 130文

正徳元年(1711). 米1石は銀58匁(1匁は銭165文)・米価は大きく変動します。  
天保14年(1843). 米1石は銀81匁(天保15年=弘化元年)



家の隠居所で大塩平八ゆかりの書院(陽明学義した所)



一里塚跡碑



泊まりの客引き(御油宿の場面)



これは水口宿の見付です

明治天皇の大阪行幸時、内侍所となった



盛泉寺



難宗寺



難宗寺北西にある道標  
○「御行在所」明治天皇の宿泊。  
○「御仮泊所」大正天皇が皇太子時に宿泊。  
○東海道守口街道  
○右大坂 左京とある。

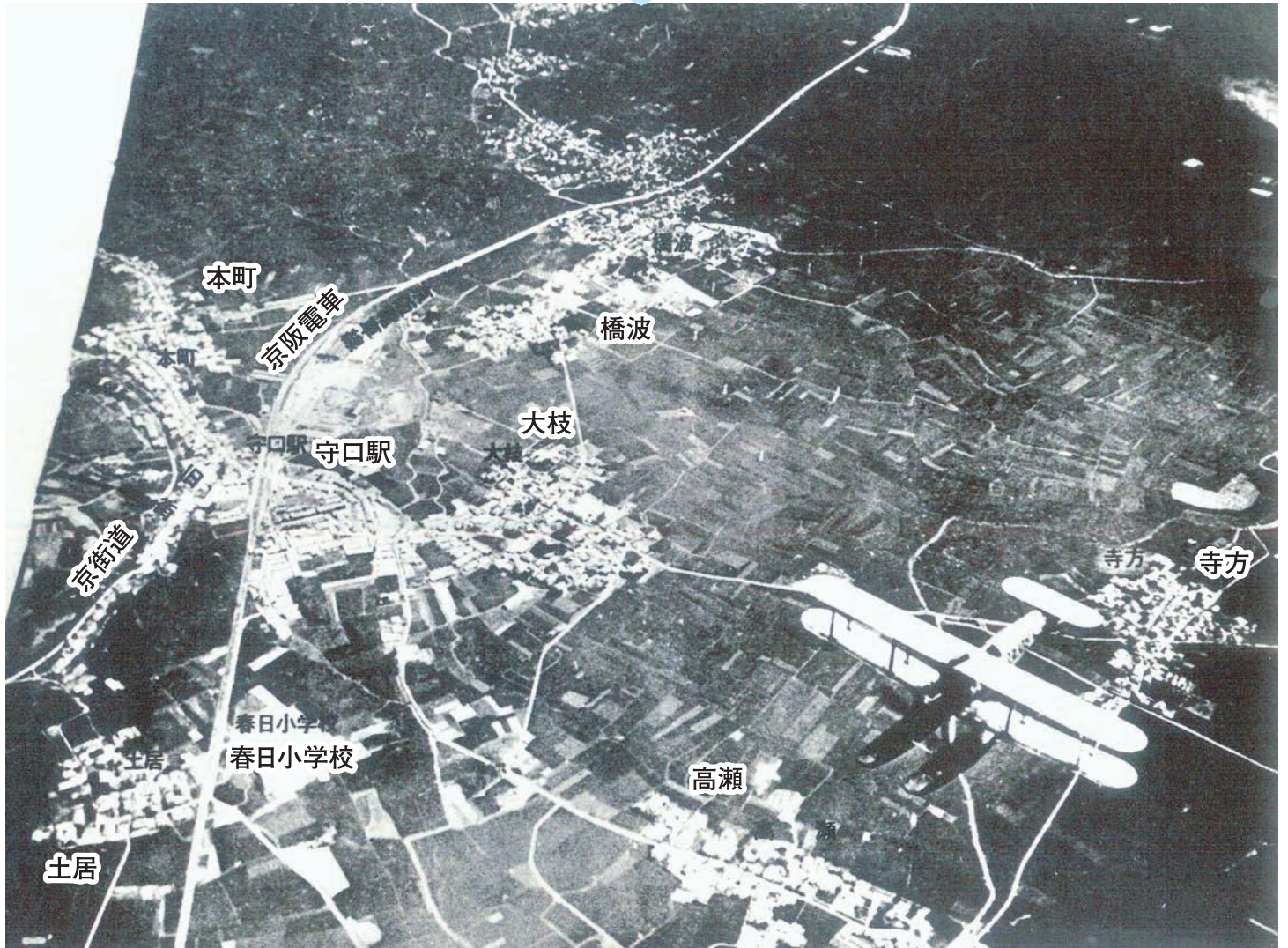


京街道 堤ノ町より、奈良街道に通じる来迎坂。

2316

# 守口町の珍しい航空写真

## 大正12年ごろ



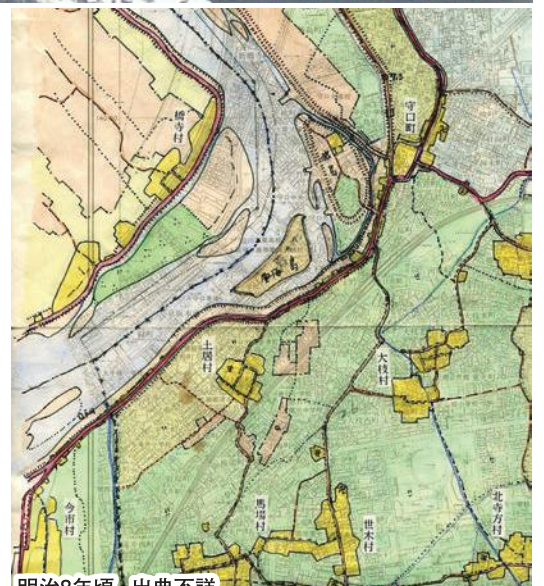
写真は飛行機のさらにその上の飛行機から撮ったもので非常に貴重な写真です。大正12年(1923年)ごろに撮ったもので、今から100年前の守口町・三郷町あたりです。

左端中央が京阪電車の「守口駅」です。その南に春日小学校があります。左側の集落は土居村です。尾翼の下の集落は寺方村です。

写真を見て当時をいろいろ想像してみてください。左下に春日小学校とありますが、春日小学校は昭和32年(1975年)創立です。位置が分かるように記入したものでしょう。

	大正4年	大正7年
守口町		
人口	2,402人	2,575人
男	1,228人	1,272人
女	1,174人	1,303人
戸数	569戸	657戸
庭窪村		
人口	4,486人	4,463人
男	2,167人	2,134人
女	2,319人	2,319人
戸数	791戸	800戸
三郷町※1		
人口	2,592人	2,621人
男	1,274人	1,292人
女	1,318人	1,329人
戸数	457戸	458戸

※1 橋波・世木・大枝・馬場・寺方を含む



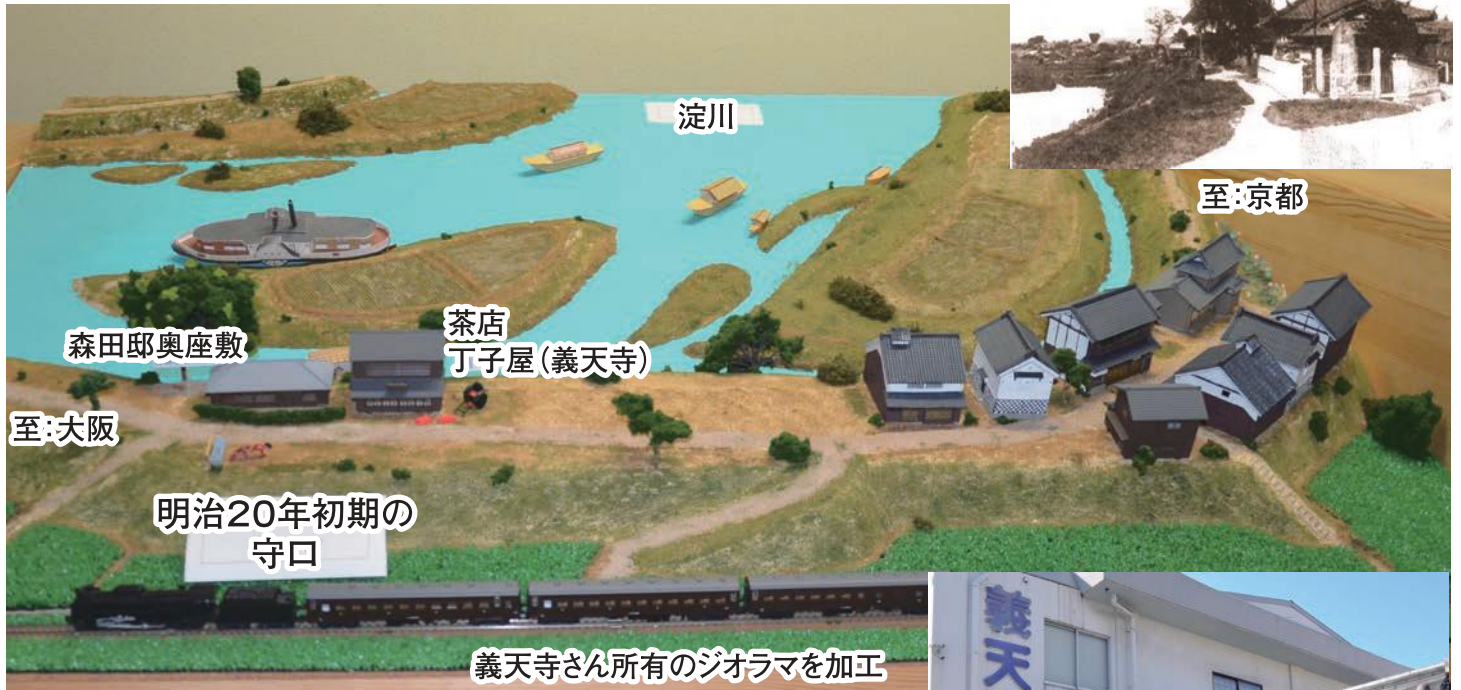
明治8年頃 出典不詳

2317

# 義天寺と淀川

(本町1)

引用(参考)元:Seijun's Blog  
守口・義天寺へ



右上の写真は明治30年(1897年)頃の義天寺で、あまり鮮明ではありませんが、大変貴重なものです。

左の白い部分が当時の淀川です。右が東海道、お寺をはさんで淀川における細い道がありました。

豊臣秀吉は文禄3年(1594年)に伏見城を築城しましたが、伏見と大坂を結ぶ道がなかったため毛利三家と淀屋に命じて文禄堤を築堤しました。もちろん淀川の洪水や戦略・水運を考え、堤防上を東海道(京街道・大坂街道)としました。

元和元年(1615年)、徳川に政権が移ると街道の整備にかかり、西国大名の行動を監視するために大津から大坂まで東海道を延長しました。

そこで守口は東海道57番目の宿場になり、江戸時代から宿場町として栄えました。

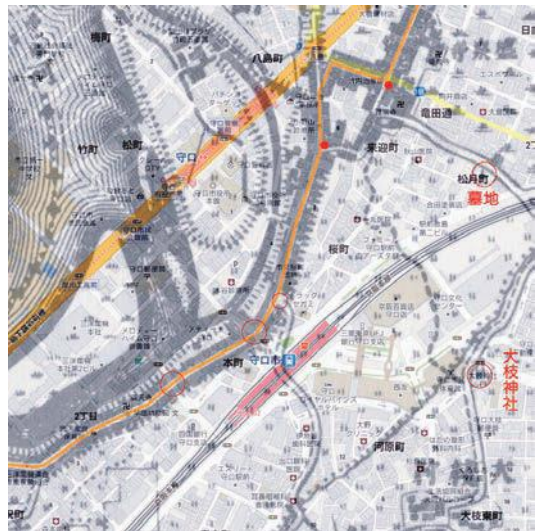
秀吉の時代に築堤された文禄堤もいろいろな事情でとりこわれ、現在720mほどが残っているだけです。

余談ですが、義天寺は明治のころまでは、森田伊六の茶店「丁子屋」でした。明治23年(1890年)7月に佛立宗開祖日扇上人が三十石船で大坂へ下る途中、茶店の奥座敷で休まっていたところ、急に体調がわるくなり遷化されました。その茶店を買い取り日扇上人によって造られたのが義天寺です。

右下の資料は明治18年(1885年)の測量地図と今の地図を重ね合わせたもので、淀川と文禄堤(京街道)、現在の位置関係がよくわかります。右下に義天寺があります。



至:京都

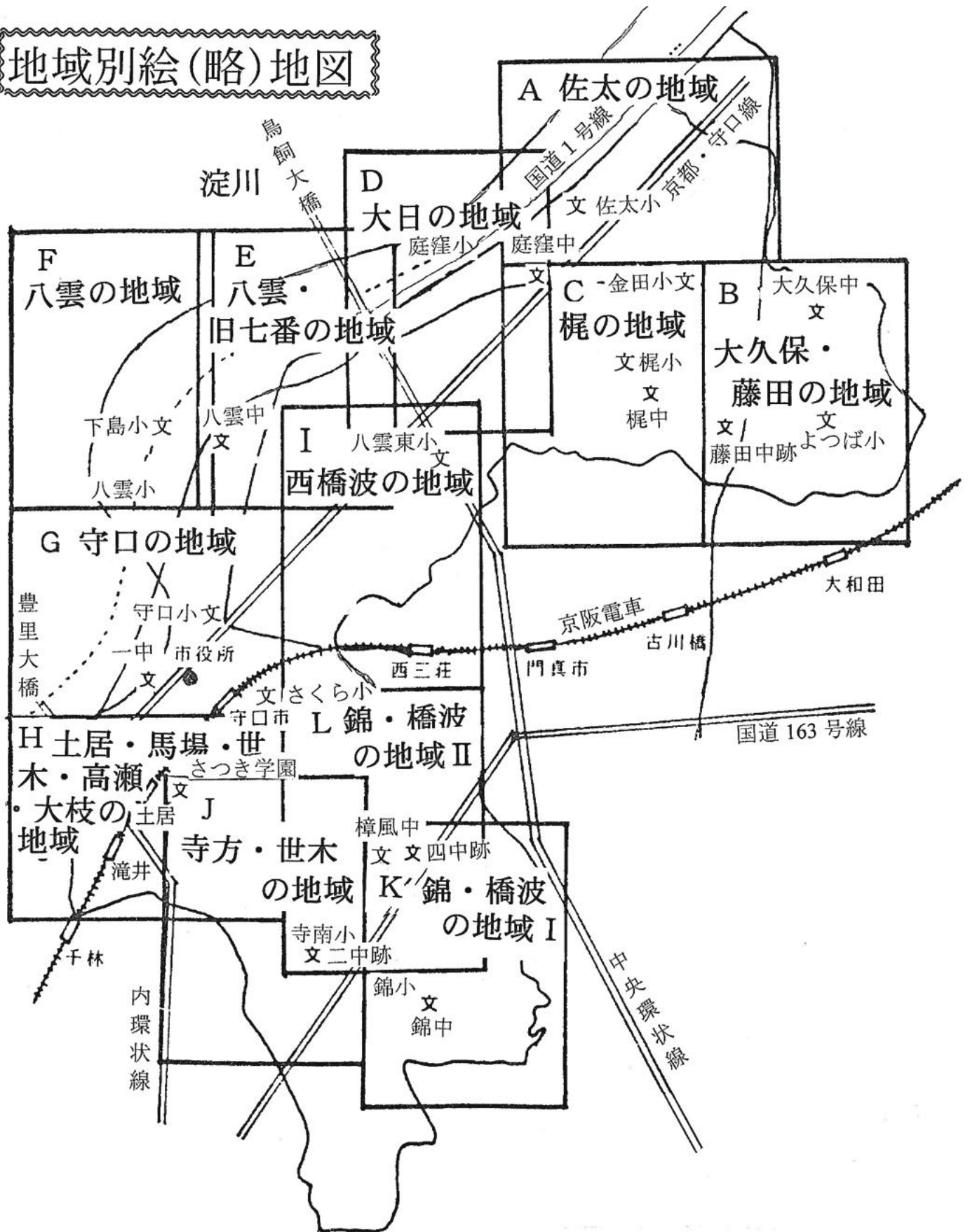


引用(参考)元:新之介のBlog  
京街道を歩く・守口の文禄堤





# 地域別絵(略)地図



守口市教育研究会社会科中学部会編  
 の地図をお借りしました。平成2年(1990)3月製作

# 佐太の地域



佐太と摂津を結ぶ渡りで、鳥飼大橋などがかかり昭和48年になくなりました。



佐太の植文(記念碑)  
佐太小学校



大阪府水道部  
大庭浄水場

守ロスカイ

府営住宅  
佐太中  
佐太保育所

## 来迎寺

石清水八幡宮より法明上人(融通念仏宗の中興)が天筆如来を授かり、実尊上人が正平2年(1347)に譲り受け実尊上人が、大庭の庄に、紫雲山来迎寺を創建し、延宝6年(1678)に現在地に移転しました。当寺には珍しい「幽霊の足跡」があります。



幽霊の足跡のある寺

宿場間の長い所に置かれた休憩所の施設がある所で、茶店や食堂などがあります。通常の宿場と違い、宿泊は禁止されています。いろいろな店や職人も多く、ちよつとした町で、その地方の中心地でもありました。

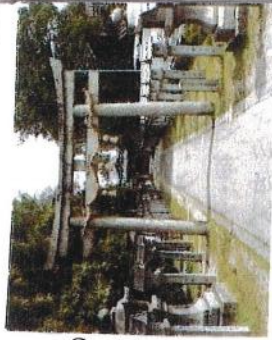
## 菅相寺

菅原道真の死後50年程の真の所有地に村人たちが、道真自作の木像と画像を御神体として創建された神社です。その後永井尚政によって本殿など造営されました。当宮には室町時代の天神絵巻があります。

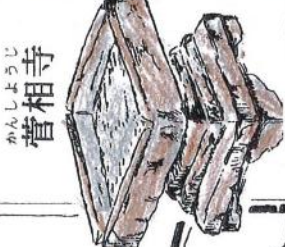
菅相寺

## 佐太天神宮

菅原道真の死後50年程の真の所有地に村人たちが、道真自作の木像と画像を御神体として創建された神社です。その後永井尚政によって本殿など造営されました。当宮には室町時代の天神絵巻があります。



その後永井尚政によって本殿など造営されました。当宮には室町時代の天神絵巻があります。



菅相寺

観音堂の屋根の露盤



行基がつくったともいわれ、佐太天神の奥の院で宮寺です。左は路盤です。



金龍寺  
懸仏

曹洞宗で宇治の興聖寺の末寺です。津嶋部神社の宮寺で、当寺には津嶋部神社からゆずり受けた、懸仏があります。

## 来迎寺



大きな建物は来迎寺です。手前の石垣が美濃国加納藩3万2千石永井氏の陣屋跡で宝永元年(1704)に渚(枚方市御殿山)より当地に移されました。この地方に1万2千石の領地があり、蔵屋敷もかねていました。

津嶋部神社



津嶋部神社

延喜式の古い神社で、旧大庭(金田・梶・北・東・藤田村)、寝屋川市黒原・津嶋江村の氏神さんです。祭神は、津嶋部大神・スサノオノミコト・菅原道真で、境内には皇太神宮・白龍稲荷社・若宮天神・八幡宮・巖島神社などがお祀りされている。

この地図は、あくまで参考にしてください。光景が異なる場合があります。ご了承ください。

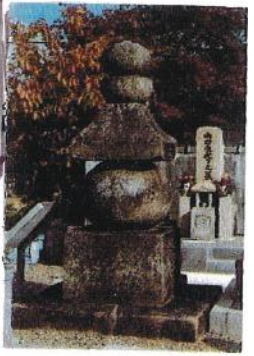
# 大久保・藤田の地域

妙楽寺  
金田小学校



## 蓮台寺跡

京都仁和寺の末寺で鳥羽天皇(1107~23)の開基の寺です。明治維新の神仏分離政策で廃寺になり歴代住職と中西家の墓があります。



蓮台寺五輪塔

大窪・佐太  
水はけが悪い  
この辺り一帯は湿地帯で水はけが悪く水痛み、水腐れの被害が毎年おこり困っていました。  
たる地といって田をかりてもらうのに酒樽もってお願いに行きました。

この寺は延宝年間(1673~81)に洪水で流され天和2年(1682)再建され、そのときにツジが植えられ、現在美しく咲いています。

明和6年(1769)に大久保東村に道場として建てられ、来迎寺の末寺でしたが、今は浄土真宗本願寺派の寺で、昭和46年に本堂が新築されました。

## 旧中西家 もりぐち歴史館



尾張藩祖、徳川義直の生母、西之部屋、お亀の姉のお鶴の家でした。  
中西家は、代々尾張藩天満屋敷の留守居役をつとめていた名家です。  
現在の建物は、寛政5年(1793)に建てられたもので、周囲には広い濠があり、内側には土塀があり、土豪の屋敷です。貴重な武家屋敷です。



極楽寺  
来迎寺念仏宗の末寺でしたが、今は浄土宗の寺で、毎年春の彼岸の中日に、弥治右衛門さんの追悼法要がおこなわれています。



弥治右衛門家のお墓

大久保・藤田の地域は、寺方地方と同じように低湿地であった所で、藤田村の小泉弥治右衛門が、一家を犠牲にして、幕府の許可のないまま樋(水門)をつくりました。そのおかげで当地の560余町が恩恵を受けましたが、慶安2年(1649)に弥治右衛門さんをはじめ一家全員が処刑にされました。処刑された場所が公園になり、弥治右衛門さんお墓もあり、今も感謝してしのんでおられます。



門真市宮野町8にある茨田の堤跡碑

大蔵閘碑  
弥治右衛門の樋のおかげで、農作物の収穫がふえ大蔵閘とよんで、大蔵新田、大蔵橋、大倉町といった地名がつけられています

おおくらこうひ

大蔵閘碑

弥治右衛門の樋のおかげで、農作物の収穫がふえ大蔵閘とよんで、大蔵新田、大蔵橋、大倉町といった地名がつけられています

# 梶の地域

## 大庭北遺跡

時代がかさなっている複合遺跡

奈良時代に「大庭里」「大庭庄」ともよばれていたのはこの辺りか。

縄文晩期=突帯文土器(生駒西麓山の粘土を使用)  
弥生時代=摂津の土器(口が二段に外にそって

いる)

古墳時代=後期の遺構・遺物(人が住んでいた)

奈良時代=須恵器・瓦

平安時代=井戸・土坑(土をほったあな)

鎌倉時代=井戸・溝・里道・水田

日本最古花押つきの木簡出土。

梶遺跡

## 真楽寺

浄土真宗本願寺派の末寺で承応3年(1654)、僧浄信が念仏道場としてたてたのがはじまりです。江戸時代後期のお堂の一部の材料をさい利用して明治13年(1880)に再建されました。



真楽寺

## ハスの名所

平安時代ハス見物に、貴族たちが多くきました。ハスは良質で、中將姫が当麻寺の曼荼羅の資財になりました。



来迎寺跡

板戸橋(月出橋)

## 金田村

大窪庄(大久保)の村の一つ。地名の由来は、均田制からとも、または、良質の田などで金田と呼ばれたともいわれています。

大庭北遺跡

金田小

大念寺



大念寺

前は来迎寺の大念仏宗の末寺でしたが、今は浄土宗の寺になっています。当寺に享禄五年(一五三二)の石造の地藏菩薩立像、石造弁天在天像は、和泉砂岩制で、市の石造美術品です。

前方後円墳の(帆立貝式古墳)

平成1年(1989)2月に、佐太東町1丁目の梶遺跡より、3基の古墳がみつき、その一つが全長37mの前方後円墳の前方がみじかい帆立貝式古墳でした。湿地帯からみつかっのは、6世紀の最大きゆうの古墳です。周辺からは多くの形象ハニワなどが出土しました。



梶小学校



梶中学校



火薬工場跡

昭和20年の初めまで工場がありました。爆発事故がおこったこともありました。

梶南会館 今は南公園に

終戦直後は、ここで、小学校4年生以上の複式授業がおこなわれていました。

「ひなだ」が残っている梶町の家

「ひなだ(洗い場)」=多くの家は水路に面してたっていました。ひなだは洗い物をする所で「こしっぽ」とも呼ばれていました。濾過(こすこと)用のつぼを使って飲料水として使っていました。

「ひなだ」とは、雛祭のときの「ひなだん」に似ているからです。これが訛ってひなだになったといわれています。



ひなだ



梶にも大峰山や愛宕山の信仰があったのですね。

梶二丁目

寛政四年の大峰山元緑十二年の愛宕山の灯籠

# 大日の地域



庭窪小学校



**白山神社**  
 いくつころにできたのかは分かりませんが、お祀りしてある神様は、イザナギノ尊・イザナミノ尊・ククリヒメ命・フヌシノ神・アメノコヤネノ尊・タケミカズノ命の6柱です。加賀の国、第一の宮の白山神社の神様で旧六番村・旧四番村・旧三番村の氏神さんです。江戸時代の初期にこの地に藤の森より移されたのではないかと思います。  
 ※宮寺は白山寺でしたが今はありません。

藤の森の石碑  
 もと白山神社があった所、藤の名所でした。

府水道浄水部  
 庭窪浄水場  
 教応寺の釣鐘



親鸞上人の北陸地方へ行かれたときの姿の「草鞋杖木像」や「天承1年(1131)の瀬戸焼きの祇園社用の油差し」があります。また、長柄橋の人柱になった巖氏を供養の大願寺にあった釣鐘が当寺にあります。

**来迎寺跡**  
 正保元年(1646)から28年間、来迎寺がありました。敷地は700平方メートルほどありました。



浄土宗西向寺



妙見堂

# 八雲・旧七番の地域

しょうこうじ  
正迎寺

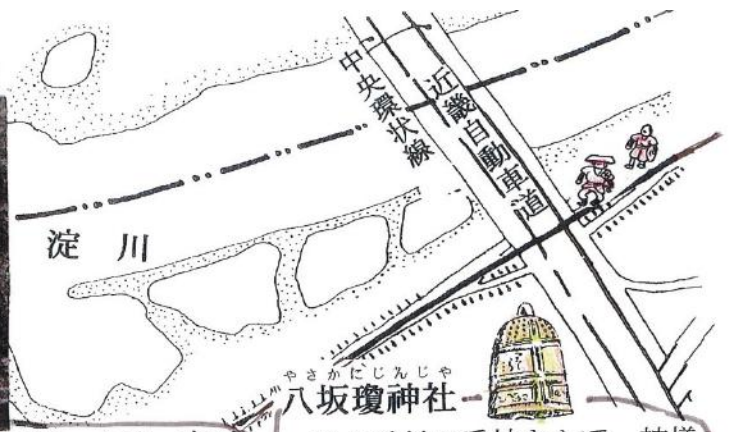


浄土真宗本願寺派の末寺で、那須又五郎為成が正平10年(1350)、小高瀬庄大枝にいた存覚上人に帰依して開かれた寺です。  
存覚上人の書かれた、十字名号や親鸞上人の銅像があります。

八雲遺跡の碑



この碑から、八雲・七番・東西橋波の村が用水を引いていました。



八坂瓊神社

旧七番村の氏神さんで、神様はスサノオノミコトのようです。宮寺は今はありませんが広隆寺で、ここにあった釣鐘が京都の花脊の峯定寺にあります。この釣鐘は四国の金剛光寺から広隆寺に、さらに京都の山奥まに移っています。不思議です。

八番共同墓地

文禄塚のあったところ

八雲遺跡

守口市での縄文時代からの複式遺跡で、集落跡、土地の下2つの所から、石包丁、鍬、田下駄、炭化米、もみがらなどが出土し、また、2つの竪穴式住居跡から、管玉や玉作りの道具が見つかりました。

八雲遺跡

八雲小学校

京街道

京阪北本道

西

保育所

用水路

旧北十番村

専教寺

守口東高校

正覚寺

板仏碑

大阪市水道局

庭窪浄水場

京街道

豊臣秀吉が文禄堤をつくり、伏見城と大阪城を結ぶ最短距離の道を文禄堤上に京街道をつくりました。大坂夏の陣後に政治が徳川に移り、東海道として、四つの宿場をおき、高麗橋まで伸ばしました。

先達の先生が戦後、国道一号線をつくるために測量のアルバイトに行かれ「こんな広い道をつくってどうするや」と云って笑っていたといわれていました。

守口東高等学校

浄土宗来迎寺佐太派とありますが、現在は知恩院の末寺となっています。本尊は、阿弥陀如来です。境内には室町時代や江戸時代地藏石仏が、珍しい十三仏の板碑もあります。寺の北側には、羅漢堂があります。

浄土宗来迎寺佐太派とありますが、現在は知恩院の末寺となっています。本尊は、阿弥陀如来です。境内には室町時代や江戸時代地藏石仏が、珍しい十三仏の板碑もあります。寺の北側には、羅漢堂があります。

浄土宗来迎寺佐太派とありますが、現在は知恩院の末寺となっています。本尊は、阿弥陀如来です。境内には室町時代や江戸時代地藏石仏が、珍しい十三仏の板碑もあります。寺の北側には、羅漢堂があります。

浄土宗来迎寺佐太派とありますが、現在は知恩院の末寺となっています。本尊は、阿弥陀如来です。境内には室町時代や江戸時代地藏石仏が、珍しい十三仏の板碑もあります。寺の北側には、羅漢堂があります。

浄土宗来迎寺佐太派とありますが、現在は知恩院の末寺となっています。本尊は、阿弥陀如来です。境内には室町時代や江戸時代地藏石仏が、珍しい十三仏の板碑もあります。寺の北側には、羅漢堂があります。

浄土宗来迎寺佐太派とありますが、現在は知恩院の末寺となっています。本尊は、阿弥陀如来です。境内には室町時代や江戸時代地藏石仏が、珍しい十三仏の板碑もあります。寺の北側には、羅漢堂があります。

浄土宗来迎寺佐太派とありますが、現在は知恩院の末寺となっています。本尊は、阿弥陀如来です。境内には室町時代や江戸時代地藏石仏が、珍しい十三仏の板碑もあります。寺の北側には、羅漢堂があります。

浄土宗来迎寺佐太派とありますが、現在は知恩院の末寺となっています。本尊は、阿弥陀如来です。境内には室町時代や江戸時代地藏石仏が、珍しい十三仏の板碑もあります。寺の北側には、羅漢堂があります。

浄土宗来迎寺佐太派とありますが、現在は知恩院の末寺となっています。本尊は、阿弥陀如来です。境内には室町時代や江戸時代地藏石仏が、珍しい十三仏の板碑もあります。寺の北側には、羅漢堂があります。

浄土宗来迎寺佐太派とありますが、現在は知恩院の末寺となっています。本尊は、阿弥陀如来です。境内には室町時代や江戸時代地藏石仏が、珍しい十三仏の板碑もあります。寺の北側には、羅漢堂があります。

浄土宗来迎寺佐太派とありますが、現在は知恩院の末寺となっています。本尊は、阿弥陀如来です。境内には室町時代や江戸時代地藏石仏が、珍しい十三仏の板碑もあります。寺の北側には、羅漢堂があります。

浄土宗来迎寺佐太派とありますが、現在は知恩院の末寺となっています。本尊は、阿弥陀如来です。境内には室町時代や江戸時代地藏石仏が、珍しい十三仏の板碑もあります。寺の北側には、羅漢堂があります。

浄土宗来迎寺佐太派とありますが、現在は知恩院の末寺となっています。本尊は、阿弥陀如来です。境内には室町時代や江戸時代地藏石仏が、珍しい十三仏の板碑もあります。寺の北側には、羅漢堂があります。



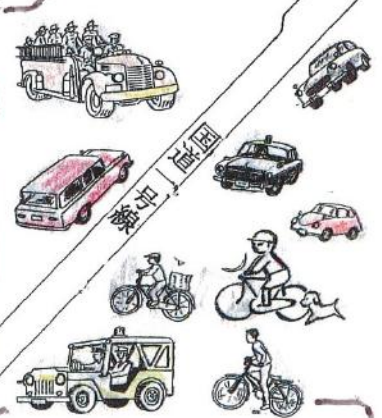
八雲中学校



専教寺  
蓮如上人の弟子、善祐が自宅を庵室にしたことが、はじまりです。  
両手に数珠をもった僧衣の蓮如上人の座像があります。



守口東高等学校



先達の先生が戦後、国道一号線をつくるために測量のアルバイトに行かれ「こんな広い道をつくってどうするや」と云って笑っていたといわれていました。

# 八雲の地域



八雲神社



## 八雲神社

神様は、「牛頭天王」  
(スサノオノミコト)  
おうじん 応神天皇(八幡宮)・  
菅原道真(天満宮)の三  
柱で、お祭りは10月の  
第3土日で、各町から  
6台の地車が出て大変  
にぎわいます。守口の  
重要な文化財です



十一面観音菩薩

## 光明寺

大同元年(806)弘法  
大師によってたてら  
れたと伝えられる真  
言宗の寺です。

本尊は十一面観音  
像で、平安初期のも  
ので、国の重要文化  
財です。

その他、「聖天」さ  
んが祀られており民  
間信仰として、多く  
の人からたしまれて  
います。八雲神社  
の宮寺です。



光明寺

## 七番の渡場跡

八坂瓊神社

## 摂津市

### 来称寺

江戸時代は来迎寺の末  
寺でしたが、現在は浄土  
宗の知恩院派の末寺で  
す。室町時代の宝鏡印塔  
の台座があり、寺の前には  
愛宕山天保と書かれた  
灯籠があり、このあたり  
の人たちの愛宕山信仰が  
うかがえます。

文禄5年(1594)から慶長時代  
にかけて、豊臣秀吉が毛利三  
家(毛利輝元・小早川景隆・  
吉川広家)と土木工事にくわ  
しい淀屋に命じて約28km弱  
の堤防を修築させました。

もと文禄堤が  
あった所です



下島小学校



下島の渡し跡

### 弥生式土器 出土地



九番村の名が  
入った灯籠



来称寺

下島公園  
江戸時代の末  
に文禄堤切れ大  
き池になってい  
ました。

八雲樋から引  
かれた水が、南  
十番へ流れて行  
く途中の用水路  
にかかる橋。

### 五箇樋跡の碑

五か所(庄)とは、守口・高瀬・  
寺方・橋波・稗島(門真)の村  
が、村内の水は金気が多く、飲料  
水としては、適していなく、樋組  
をつくり、淀川より水をひき、飲  
料水にしていました、また、水  
路にも利用していました。



### 外島

以前は淀川の中

願了寺  
善照寺  
紀功碑(よもぎ石)  
旧南十番村

明治33年(1900)淀川の堤防の  
つけかえにより、下島が外島に  
ひっこすときの村人の気持ちや  
苦勞をたたえた記念碑。40軒中  
20軒がひっこしました。



功勞碑





# 西橋波の地域



大阪市水道局  
庭窪上水場

大阪市交通局  
大日検査場

地下鉄  
大日

近畿本線  
西三庄

やくも東  
幼稚園

京阪病院

パナソニック株式会社

国道一号線



八雲小学校

三洋電機工場跡



パナソニック工場

いちきしまじんじゃ  
市杵島神社



八雲東遺跡  
パナソニック  
工場

八雲東遺跡  
縄文・弥生式土器出土地



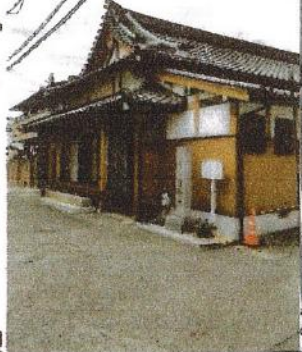
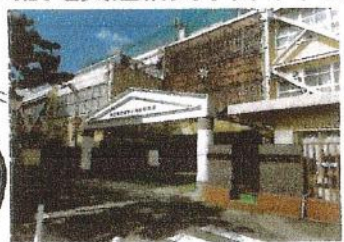
弘化5年(1848)の記録では、  
小さな祠があり、昭和37年に  
再建、鳥居には、文化15年(18  
18)、安政6年(1859)の狛犬あり、  
灯籠や明治100  
年の記念碑がり、  
芸能の神として親  
しまれています。



八雲  
ポンプ場

唯称寺

大阪電気通信大学高等学校



真宗大谷派の寺で、半鐘には  
寛政7年(1795)とあるので、こ  
のころにはあったと思われます。  
古い道場の形式の寺で、道か  
ら直接本堂にのぼれるのです。  
最近新しくりましたが、形  
式は昔のままです。

土器出土地  
橋波西之町遺跡

大阪電気  
通信大学  
高校

市杵島神社

行基道

覚了寺

昔の面影  
を残す町並

唯称寺

覚了寺

永正13年(1516)僧、  
道教が本願寺の実如  
上人より阿弥陀仏の  
画像をさずかってで  
きた寺と伝わってい  
ます。その後木製の  
阿弥陀仏をいただき、  
覚了寺の寺号を  
いただいた寺です。



覚了寺

# 寺方・世木の地域

**昭和30~32年ころ**  
松下電器より出たコークスの山になっていた

**行基道**  
京阪池  
京阪電車が、土居-野江間を高架にするため土を取り、さつき学園の前の道を列車で運びました。  
取ったあとが大きな池に...

寺方南小学校  
高瀬神社  
高瀬川跡碑  
常称寺  
大阪国際中高等学校  
京阪池跡  
正福寺  
源の行家の子孫  
義弘が文明7年(1475)にたてた寺  
H産須那神社  
南部公民館  
寺方南小学校  
池が  
方広寺  
極楽寺  
南小学校跡  
提灯おどり  
喜左衛門記念碑

護念寺(世木御堂)の前に川が流れ七、八十一年まで橋が残っていました  
大正三年一月  
御堂前橋の石碑  
六とうまへはし  
御堂前橋

水路の多かったところ  
樋(水門)のあった所  
正福寺  
源の行家の子孫  
義弘が文明7年(1475)にたてた寺

実悟上人が復興した寺で、本願寺の格式高い寺です。寺として、寺方・大枝・瀧井・茨田浜・横堤・稗島などの村々を治めていました。  
(各村の地主の墓があります)  
○のち本泉寺は移転、そのご懸所となります  
○境内には、大塩平八郎の乱に参加した、高弟橋本忠兵衛の墓や隠れキリシタンの墓と思われるマリア地蔵があります。

**伝 和泉式部の墓**  
和泉式部は平安時代の歌人です。宝篋印塔は南北朝時代に立てられた物で「康永三年(1344)四月八日、願主、妙彌道延」とあり、妙彌とは出家して僧となった男性のことで何らかの供養塔でしょう。

**昔の水路**  
低湿地のため昔は道路より水路が発達していた  
一面レンコン畑だった

**提灯おどり**  
守口を代表する郷土芸能。昔は一子相伝、門外不出でした。文化・文政のころから盛んになり、片手に提灯を持ち河内首頭などにあわせ太鼓をもちいておどる喜左衛門への供養のおどりで今は市の無形民族文化財。

喜左衛門は南寺方村の庄屋で、このあたりの村々は低湿地の村で、少しの雨でも水害で農作物が取れませんでした。喜左衛門は幕府に樋(水門)を願いました。が、ゆるされず独自で樋をつくり、死刑になりました。が作物がよく取れ農民は喜び。明治十五年に記念碑がたてられた

# 錦・橋波の地域



樟風中学校

大官  
保育所

四中跡

## 西三荘用水路

昔、近くに3つの荘園があり、その西側を流れて第二寝屋川に通じる水路で、西三荘水路といえます。現在は暗渠になり、「西三荘ゆとり道」になっています。以前は水もきれく、夏には魚捕りをしたり、泳いだりしていた子どもたちの遊場でした。

中央

中央  
環状線



花博道路

府道深野南寺方大阪線

勤労青少年  
ホーム

衛生課分室

錦公民館

近畿自動車道

産土那  
神社

## 花博道路

花博の時に整備され、両側に街路樹やフラワーポットが置かれ、歩道には花や木を描いたタイル絵がつづき、守口駅や西三荘駅へと連絡しています。



錦小学校

土地はドロドロ

このあたり一面  
水田かレンコン畑  
でした



錦中学校



門真市

## 喜左衛門樋の跡の記念碑

江戸時代、寺方などの水害を守るために、喜左衛門が役人の許可のないまま、樋を中央環状線ができるまでの門真市桑才新町の所に移し、そこに記念碑が立てられました。



花博の風車

## 平成2年(1990) 国際花と緑の博覧会 会場

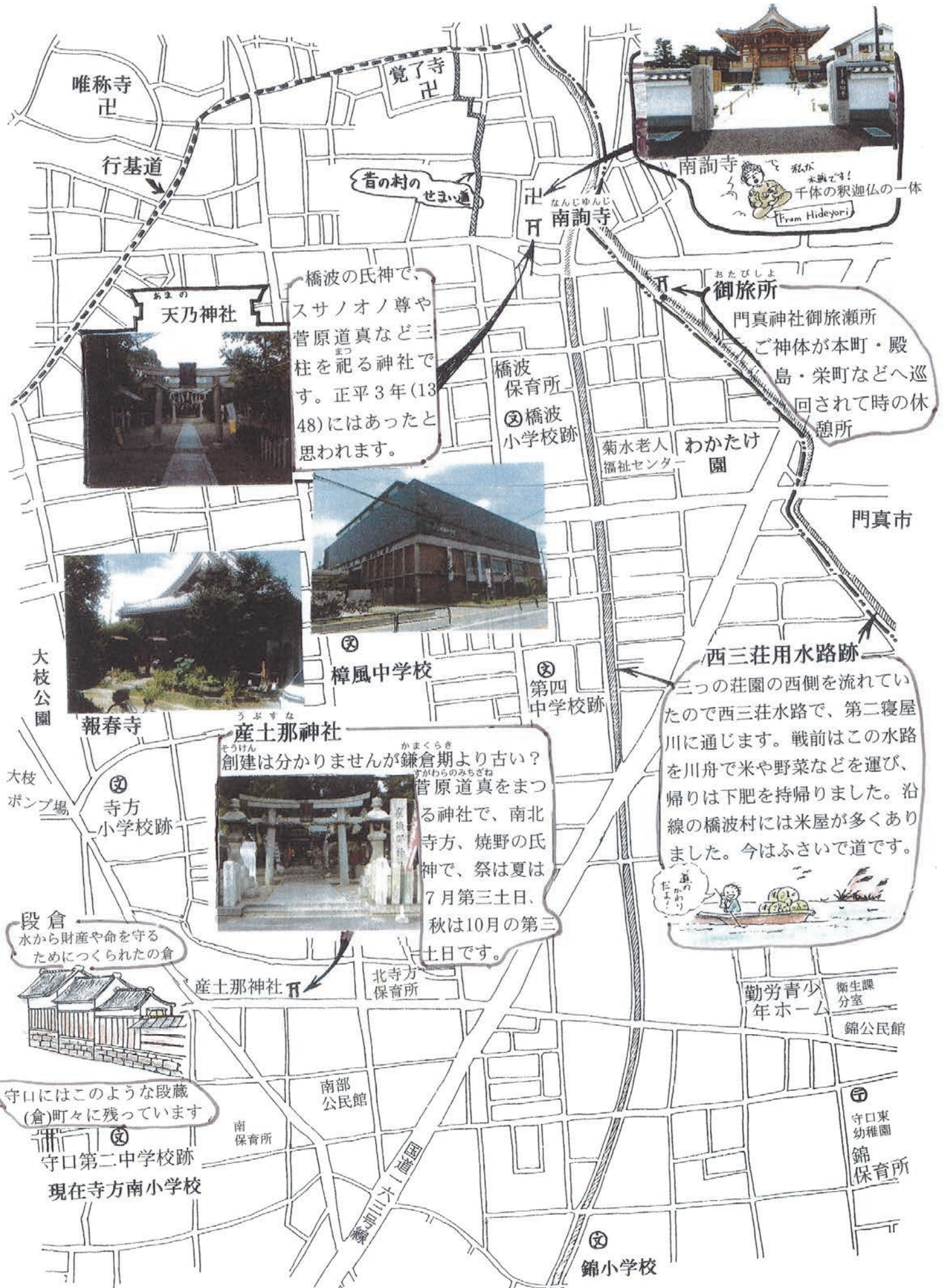
以前はゴミ山でしたが、美しい樹や花が植えられ「鶴見緑地」となり、多くのお客がきました。現在の鶴見緑地には、大温室や命の塔・風車など、花博の名残をとどめています。

花博のあった鶴見新山は昭和58年(1983)に、鶴見新山と命名されました。完成当時は45ヶ所ありましたが、現在は地盤沈下で39ヶ所です。



焼野  
現在は大阪市鶴見区になっていますが、前は北寺方からの分野がなまって焼野にまつたらしい。焼野は寺方の産土神社が氏神です。

# 錦・橋波の地域



守口市内に点在する史跡や文化財や施設を気軽に歩いて回れるように解説文と写真を掲載した「もりぐちぶらり歩きマップ1~7」「守口文化財ガイドマップ」がPDFデータでアップされています。

個人的なウォーキング等で利用する場合は、2次元バーコードを読み込んで守口市のホームページからダウンロードしてご活用ください。

※画像を利用した著作物などの二次使用はできません。

## ◇もりぐちぶらり歩きマップ（○番号は守口文化財ガイドマップと共通）

### 史跡散策コース1 文禄堤・京街道・守口宿コース



京阪電車守口市駅東口－(20m)－○「文禄堤の町」石碑(駅北西広場内)－(30m)－○十三夜坂－(100m)－(28)文禄堤・京街道・守口宿－○復原高札場－(150m)－旧徳永家住宅－(50m)－○来迎坂－(150m)－(25)難宗寺－(100m)－(24)盛泉寺－(100m)－○瓶橋の跡－(150m)－(23)一里塚跡・上見附－(320m)－(26)守口宿本陣跡(説明板のみ)－(20m)－(27)大塩平八郎ゆかりの書院跡(説明板のみ)－(20m)－(高札場跡・八島交差点付近)－(28)京街道・本町橋・守居橋経由720m)－○下見附－(200m)－京阪電車守口市駅西口  
(全 2,130m)

### 史跡散策コース2 土居・馬場・高瀬コース



京阪電車土居駅－(160m)－(29)清澤寺－(120m)－(30)守居神社－(180m)－○「實悟僧都茶毘所舊址」碑－(670m)－(33)式内高瀬神社－(60m)－(32)高瀬川跡碑－(80m)－(34)常稱寺－(130m)－(31)高瀬寺(釈迦寺)－(310m)－京阪電車土居駅 (全 1,710m)

### 史跡散策コース3 大枝・橋波コース



京阪電車守口市駅－(470m)－(36)(大枝)光明寺(存覚上人旧跡)－(400m)－(37)大枝神社－(300m)－(41)唯稱寺－(100m)－(38)市杵島神社－(240m)－○大正天皇御下車跡－(720m)－(39)天乃神社－(400m)－京阪電車西三荘駅 (全 2630m)

### 史跡散策コース4 大日・八雲・下島コース



大阪メトロ・大阪モノレール大日駅－(180m)－(11)守口市郷土資料展示室(守口市立図書館内)－(320m)－(13)白山神社－(60m)－(14)教應寺－(340m)－○藤之森碑－(630m)－○七番の渡し跡・淀川水制－(220m)－(15)八坂瓊神社－(100m)－(16)正覺寺－(400m)－(17)正迎寺－(420m)－(20)京街道道標－(830m)－(18)(八雲)光明寺－(60m)－(19)八雲神社－(490m)－八雲遺跡説明板(下島公園)－(510m)－(21)専教寺－(580m)－○下嶋の渡し跡－(360m)－(22)五箇樋跡碑・御野立所碑(桃町緑道公園 630m)－○江戸川乱歩居住跡－(50m)－大阪メトロ守口駅 (全 6,180m)

## 史跡散策コース5 大日・佐太・金田コース



大阪メトロ・大阪モノレール大日駅－(180m)－⑪守口市郷土資料展示室（守口市立 図書館内）－(320m)－⑬白山神社－(60m)－⑭教應寺－(340m)－藤之森碑－(420m)－飛来神社－(1100m)－佐太樋跡碑－(450m)－佐太渡し場石碑－(200m)－①佐太天神宮－(50m)－②菅相寺－(50m)－③来迎寺－(50m)－④佐太陣屋跡－(120m)－○佐太の段倉－(600m)－⑤式内津嶋部神社－(2500m)－大阪メトロ・大阪モノレール大日駅（津嶋部神社－(2500m)－京阪電車 古川橋駅。 京都守口線佐太天神前バス停から大日行バス、八尾茨木線宮垣内バス停 から京阪古川橋駅前行バスあり）（全 6,440m）

## 史跡散策コース6 梶・大久保・藤田コース



大阪メトロ・大阪モノレール大日駅－(180m)－⑪守口市郷土資料展示室（守口市立図書館内）－(1100m)－梶のひなだ－(300m)－⑦大念寺－(420m)－梶遺跡・梶古墳群（石碑・説明板）－(1330m)－⑥妙楽寺－(300m)－⑧もりぐち歴史館「旧中西家住宅」－(550m)－⑨藤田天社宮－(350m)－⑩弥治右衛門石碑－(800m)－茨田堤（門真市）－(220m)－堤根神社（門真市）－(140m)－京阪電車 大和田駅（全 5,690m）

## 史跡散策コース7 大枝・寺方・高瀬コース



京阪電車守口市駅－(300m)－⑳大枝神社－(400m)－㉞(大枝)光明寺（存覚上人旧跡）－(1000m)－㉟産須那神社－(700m)－㊱喜左衛門記念碑・伝和泉式部供養塔－(500m)－㊲護念寺－(450m)－㊳常稱寺－(80m)－㊴高瀬川跡碑－(50m)－㊵高瀬寺－(50m)－㊶式内高瀬神社－(300m)－京阪電車土居駅－京阪電車大和田駅（全 3,830m）

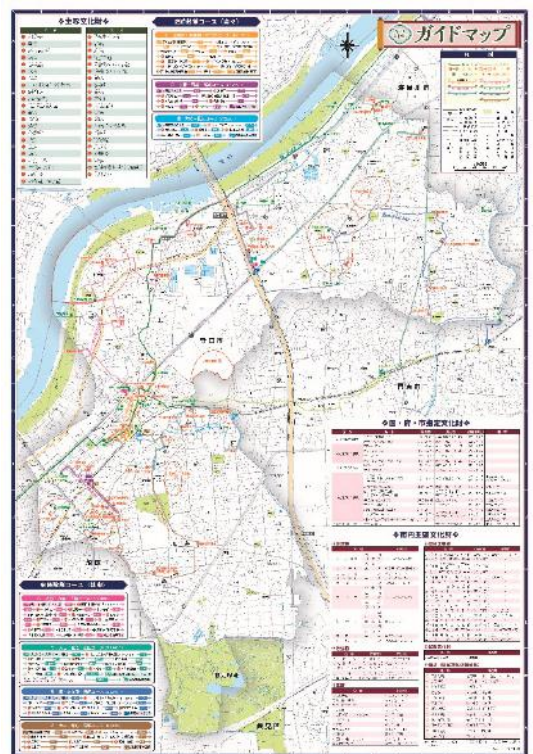
## ◇守口文化財ガイドマップ

(説明文)



(守口市教育委員会)

(地図面)



(守口市教育委員会)

守口文化財ガイドマップは守口市教育委員会が作成し、守口市役所5階 生涯学習・スポーツ振興課で配布されています。

参考・引用の書籍や文献、写真・イラストなど(順不同、敬称略、判明分)

著書名	著者	発行所
守口市史	守口市史編纂委員	守口市
門真市史	門真市史教育委員会編	門真市
大阪府史	大阪府史編集専門委員会	大阪府
グラフ守口・広報もりぐち		守口市
ふる里 守口を訪ねて	駒井正三	守口市
守口市文化財調査報告書		守口市教育委員会
守口の石造物	橋本好祐	滝野印刷株式会社
郷土史守口というところ	河野宝槌	
河内名所絵図	出雲路文治氏他	皇都書葉林、浪華書林
淀川兩岸一覽	暁 晴翁	
人物で学ぶ日本の歴史	鳥海 靖他	学校図書株式会社
東海道守口宿・守口駅	菊田太郎	柳原出版
宿駅	児島多幸	至文堂
北河内 5 市の史跡探る	松田太郎	旭書房
朝日新聞		朝日新聞社
日本歴史地名体系第 28 巻		平凡社
角川日本地名大辞典	編集委員会編	
河内平野の生いたち		大阪市立自然博物館
地域文化誌まんだ	まんだ編集部	
守口市教育研究会	中学歴史資料郷土	守口市
中学社会(歴史的分野)		教育出版株式会社
詳採 日本史(高校)		山川出版
資料による新しい歴史書		明治図書株式会社
図説 中学生の歴史		帝国書院
日本の遺跡なんでも辞典		株式会社 集英社
フリー素材のダウンロードサイト		イラスト AC など

守口市、守口市教育委員会、一般財団法人 守口文庫、本門佛立宗由緒寺義天寺、  
守口市民憲章普及推進協議会、守口門真歴史街道推進協議会、加藤忠広氏(写真)など

引用などの掲載漏れや思い違い、誤字脱字などのご容赦ください。

発行責任者：濱上知之(はまがみともゆき) t5726@gold.ocn.ne.jp

発行：令和 7 年 1 2 月

## 私たちの郷土 守口の歴史 東海道五十七次 守口宿 編者のご紹介

### 岸田 護 氏 (きしだ まもる)

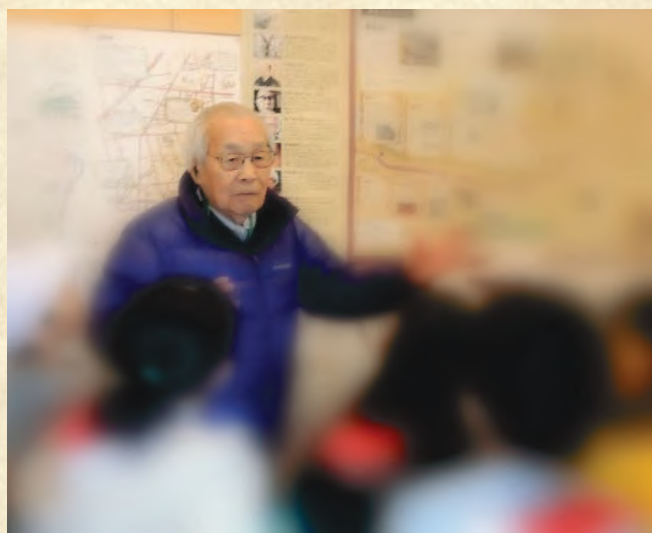
昭和12年京都府生まれ、僧籍を得るために大谷大学を卒業。

昭和38年、神戸大学から守口市立第二中学校(現樟風中学校)社会科担当教諭として赴任。

第三中学校(現さつき学園)に10年間勤務した時に、併設の夜間学級の先生や生徒と接することが多く「世の中のお役に立つためにも学びの原点といえる夜間学級で勤務したい」と思うようになった。

希望がかない、藤田中学校教諭を経て昭和63年

から平成9年3月定年のまでの8年間、三中夜間学級で教鞭をとる。



この間、子どもとともに平和を学習するために守口空襲の実態を丹念に調べ、市民の戦争体験記をまとめた平和実践資料集の発刊や守口や近隣地域の郷土史の研究に携わり、『私たちの郷土守口』を出版。守口市成人基礎学習講座

「あけぼの教室」では講師を15年間務め、平成24年3月に教職を離れた。

退職後はこれまでの郷土史研究の成果を『守口及び周辺の歴史』『東海道五十七次「守口宿」』『京街道』『門真市の郷土』『東海道 五十七次 守口宿』『守口宿マイスター検定(ガイド認定)用資料集』など関連著書として多数出版。もりぐち市民大学、東海道検定受験合格講座の講師、守口市文化財研究会参与などを務めた。

平成28年の守口市市制施行70周年記念「文禄堤 歴史シンポジウム」にはパネリストとして登壇、「守口市民は互いに協力して、この貴重な文禄堤を大切に守ろう」と力強く呼びかけた。

また令和6年6月守口市文化センター エナジーホールで開催された「守口市市民協働事業 東海道五十七次完成400年プロジェクト」では守口を代表する郷土史研究家として紹介、その功績に対して満員の観客から大きな拍手喝さいを受けた。

89歳になられた現在も、郷土史研究家として守口門真歴史街道推進協議会歴史顧問などを務め、歴史ウォークのガイドや講演・執筆活動、文化財保護などに取り組み、精力的に忙しい日々を過ごしている。

令和7年12月